

～くぬぎの森～

第 20 号

2009年 2 月 2 日

熊本電波工業高等専門学校

図 書 館

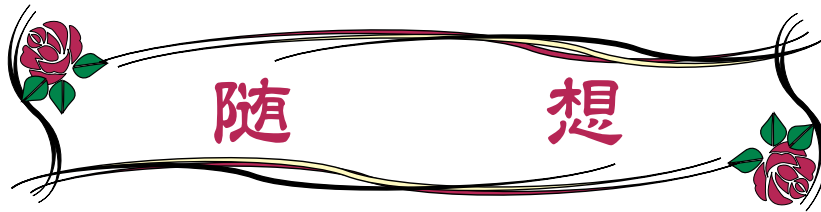


(ランタナ)

目 次

〈随 想〉

日本の100冊? 「私の1冊」.....	図書館長	田 畑	亨	2
海外に出た日本人について知ろう.....	情報工学科	村 上	純	4
私の読書暦から.....	一般科目	八 田	茂 樹	11
図書館の利用について.....	情報工学科 5年	西 山	賢志郎	12
読書の名言.....	情報通信工学科 4年	小 西	遼	13
図書館受付業務を通して.....	情報通信工学科 4年	稲 葉	潤	14
図書館での日々.....	電子制御工学科 4年	金 丸	洋 平	14
図書館に携わっての感想.....	電子制御工学科 4年	松 本	匡 史	14
図書館で学んだこと.....	情報工学科 4年	堀 田	将 伸	14
図書館で得たこと.....	情報工学科 4年	前 村	優 香	15
図書館に勤務しての感想.....	情報工学科 4年	安 武	真 美	15
〈平成20年度第30回校内読書感想文コンクール 選考結果及び作品紹介〉.....				16
第54回青少年読書感想文全国コンクール熊本県審査入賞者!				31
〈図書館改善のアンケート調査及び結果について〉.....				32
編集後記.....				34



日本の100冊？『私の1冊』

図書館長

田畑 亨

今年度、私は電波高専の図書館に携わった。学校長から役職を命じられたとき、図書館長という職務が私に課せられた校務なのだと考え、淡々と引き受けた。しかしすぐに、図書館に携わるとは如何なることか？という自問自答から始めなければならないことに気づいた。私は図書館に関する予備知識を全く持っていなかったのである。まず、人はなぜ本を読むのか、本を読む意義とは何か、そのようなことから考えた。

私は高専の専門学科教員として、かなりの歳月を過ごしてきたが、優秀で、人懐っこさのある学科学生の真剣な反応に手応えを感じながら、研究・教育、学生指導に充実した日々を送ってきた。そんな教育現場では、専門書以外の書物を読む必要性を感じず、私はおよそ文学的な素養には遠い存在として過ごしてきた。しかしながら、私は幼い頃から学生時代に至る間は、その時々で、自分の心が欲するままに、いくらかの本を読んできたように思う。

図書館長として重要な役割は、学生に書物に関心を持たせ、良書に接する機会を増やすことであると思った。高専生が興味を抱く、専門書以外の小説、教養書などはどんなものだろうと考えた。時間の余裕を見ては本屋に出かけ、1人でブックハンティングをしたりした。最近では、全国紙新聞の日曜版に掲載されている「今週の書評」に紹介されている話題の幾冊かの書物に目を通している。

ところでNHK BS 2では、毎朝8時から15分間、「日本の100冊」という番組の放送が始まった。本に興味を失いつつある現代人も、この番組を見ると、思わず本を読みたくなるという。著名人が心に残る大切な『私の1冊』を持ってスタジオに登場し、読んだ契機や状況、受けた影響などを具体的なエピソードも交えて、その魅力を語りつくす。「あなた

にも是非、読んで欲しい」と思いを込め熱いトークが展開されていく。

ある朝、同番組で、ある有名人が小さな文庫本を示しながら、「これが私の人生の転機を与えた本です」と雄弁に話していた。私は、この番組は有名作家や読書家が、多くの視聴者のために推奨できる本を紹介する番組かと思っていた。しかし、番組が意図することは違っていった。読書とは自分の心に残る書物を見つけることであり、書物が人の心を豊かにするものだと語っていることに気づかされた。

知りたい深層の詳細な情報は、まとまった文書等が書かれている書物を読むことがどうしても必要である。しかし最近、メディア多様化の影響を受けて、若者を中心とした活字離れが進行している。出版各社は、販売不振を改善すべく、読者のニーズに沿っている新刊書をつぎつぎに発刊していく。世の中には、話題の新刊書とやらが非常に溢れているが、ベストセラーになった本でない限り、何年か経つと、ほとんどが廃刊になって、書店から姿を消してしまう、今はそういう時代である。

学生の皆さんが感銘を受けるかもしれない新刊書が、今、発刊されているかもしれない。しかし普段から本を探す習慣を持たないと、大切な『私の1冊』を見逃し、出逢うことができなくなるかも知れない。何か自分の心が欲するとき、是非、答えてくれるような書物を積極的に探して貰いたいと思う。そのような『私の1冊』は他の学生も必要な本であり感銘を受けるかもしれない。近い将来、高専図書館で、学生の皆さんが選ぶ電波高専の100冊『私の1冊』を紹介するような文集が発刊できれば素晴らしいと思う。

さて、『日本の100冊』ではないけれど、私にも『私の1冊』とも言える本があった。それは、私が大学生になって間もない頃、人生とは何か？如何に生きるべきか？などと人並みに自問自答していた多感な時期に、その本に出逢った。本の題名も著者も忘れてしまったけれど、その後の自分の生き方に多くの示唆を与えてくれた1冊の小さな文庫本は「人

生論なにがし」というタイトルであったと思う。

後になって気づいたことではあるが、この本の内容はニーチェらによる人間の存在そのものに問いかける哲学的思考に基づいた普遍的なものであって、この著者が人生論として平易に解説したものであり、このような考え方を主張する類似の書物は多く存在することがわかった。ここで『私の1冊』について、紹介してみたいと思う。

この本によると、人が生きていく上で、その人の人生を豊かにし、軸足のぶれない望ましい人格を形成するためには、人は“真”、“善”、“美”を限りなく追求する必要がある、どれかが欠けても豊かな人間にはならないと語っていた。“真”の追求とは、生きていく過程で、何事にも真偽の判断を迷わず正しくできるように、常に物事の真理を追求していくように心掛けよということの意味している。

学生諸君は電波高専という高等教育機関で将来のプロフェッショナルなエンジニアを目指して、勉学に励んでおられる。「君はなぜ学ぶのか」と問われたら、とっさに誰もが優秀な技術者になるためであると答えるであろう。しかしこの本によると、高専で真理探究の学問に励むということは、“真”の追求であり、人間が存在することの価値を高めるものであるということである。

すなわち、人が高度に発展した今日の文明社会で生き抜くためには、科学技術などの物事の真実に関する多くの知識を学び、それを尊重する生活習慣を身につけておくことが不可欠であるという。人が何らかの行動を決断するとき、正しい（真）か、間違い（偽）かを考えて、決断することが大変、重要であり、何事にも決してぶれることなく、正確に即断できるようになるとこの本は語っているのである。

例えば、君がお金に困っていて、夜道に落ちていた大金を見つけ、誰からも見られていないので自分のものにしようと考えたこともあるかもしれない。少なくとも、その場で、しばらくどうしようかと迷うことはあるであろう。

しかし、もし君が真偽の判断が優れていて、“真”を尊重すれば、これは明らかに“真”でない誤りであると直ちに即断できるはずである。なぜかというと、君が当事者でなく、客観的に判断できる状況であれば、やっではいけないこととすぐ思えるはずなのである。

最近の日本の政治家が、都合や状況によって、意図的に判断を変え、または判断を翻すことがよくある。政治的判断とかいって、明らかにおかしい結論を出すような政治家は、正に“真偽”の判断のできない人種であり、彼等は政治家になる前に、もっと真面目に学問を学び、“真”の追求に励むべきであろう。

次に、“善”についてであるが、“善”の追求とは、生きていく過程で、何事にも良し悪しの判断を、迷わずに正しくできるように努め、そのために常に“善”とは如何なることかを理解できるように努めよということの意味している。

ほとんどの人は職業人として、職場という社会環境の中で経済活動をしながら生き抜いていく必要がある。“善”の追求とは、人と人との繋がりの中で善行に励めよということである。その過程で、人は身近の人を慈しみ、人に優しくするように努めることができる。それは道徳観念に通じ、信仰の世界にも通ずる概念である。人は善人であることにより、社会的に生きていく上で必要とする素養を正しく身につけることができ、人格者として周りの人間から損得を抜きにして愛されるべき存在になれると言っているのである。

さらに、“美”の追求とは、生きていく過程で、美しいものを見分ける審美眼を養い、常に感受性豊かで美しいものに感動できる心を持つようにせよということの意味している。

すなわち、人間は社会的動物ではあるが、その前に、一人一人の個人として生きている。究極的に、人は個人として豊かな一生を送りたいと願っている。多くの個人が人間らしく生きていくために、人間社会が形成されていると言っても過言ではないのである。“美”の追求とは、君達のような理系の人間にも必要なことであるこの本は語っている。工学技術者という職業に直接、影響はないかもしれないが、個人生活において、芸術的な美しいものを見分ける審美眼を養い、常に情緒性豊かで、美に対して感動できる心を持った人間は幸せになれるということであろう。

私は人が“真”、“善”、“美”を追求するだけで、社会の中で、もしくは人間関係で苦勞せずに生きていけるほど単純なものではないことは言いたい。しかし、人が生きていく上で、人生の本質的な意義を

見失わないようにするために、“真”、“善”、“美”という原点を押さえておくべきではなからうか。

海外に出た日本人について 知ろう

情報工学科

村上 純

日本の四囲は海であり、遣隋使や遣唐使などよりもずっと前から、海を通して文化は渡ってきた。『鎖国をはみ出た漂流者』（松原駿二郎、筑摩書房、1999年）によれば、日本人の海外渡航は16世紀末から盛んになり、1601年に始まった朱印船貿易の頃にピークに達した。山田長政などが活躍した時代である。1633年に鎖国令が出されるまでの約30年間に日本を出国した人数は10万人に達するほどであって、日本人とは国際性を持った人々であったのだと松原氏はいう。しかし、江戸期に約300年間続いた鎖国政策により、海外に出る機会とともにその国際性は失われた。

ただし例外はあって、不幸にして難破等で漂流し、海外に出てしまった人たちがいる。彼らのうちの大部分は鎖国下に育った閉鎖性から脱しきれず、内にこもってしまうタイプであったが、中には漂着先の国に見事に順応した人もいる。それは年齢的に若く、しかも柔軟な精神を持っていた人たちで、この本に載っているジョン・万次郎、アメリカ彦蔵、音吉、力松など、運命に翻弄されるのではなく、自ら切り開いて進んで行く姿勢は勇敢で力強い。

ジョン・万次郎（1827—1898）について、彼の曾孫が書いた『ファースト・ジャパニーズ 中濱万次郎』（中濱武彦、講談社、2007年）を紹介しておく。当時は「一旦外国の地を踏んだ者の帰国は許さない。もし帰国した場合は死罪」の世であることを承知の上で、日米の架け橋になろうと、彼は苦勞の末に帰国したのであったが、幕府からは重用されず、その経験が十分に活かされることはなかった。万次郎よりも60年ほど前にロシアに渡った大黒屋光太夫（1751—1828）も万次郎と同様の経験をした人物で、彼を扱った『大黒屋光太夫』（山下恒夫、岩波新書、2004年）も興味深い。井上靖の小説『おろしや国酔夢譚』（文春文庫、1974年初版）は光太夫を題材にしたもので、映画にもなって、先頃亡くなった緒方拳主演で1992年に公開されている。

◇ ◇ ◇

江戸幕府の終焉により、世は鎖国から文明開化へと変わる。江戸期を通じて3000万人程度であった日本の人口は、明治になると急増し、19世紀末には約4400万人、大正初期には約5200万人、昭和初期には約6300万人になったと『故国を忘れず新天地を拓く』（天沼香、新潮選書、2008年）にある。増え過ぎた人口に対処するために採られた政策の1つが海外への移民政策であった。

『日系人の歴史を知ろう』（高橋幸春、岩波ジュニア文庫、2008年）も参考にして記すと、1868年に駐日ハワイ領事（天沼氏によれば政商）ヴァン・リードによってグアム島およびハワイに送り出された195人の日本人が「元年者」と呼ばれる、日本から海外への移民の嚆矢である。しかし過酷な環境等により病死者が続出し、多数が帰国したため、明治政府は以後の送り出しを控えた。次に、ハワイ王国と移民協定を結んで行った1885年の移民（官約移民）で、944人が海を渡った。その後は1894年までに約3万人がハワイへ渡航したが、諸種の事情により渡航先は北米、南米へと移り変わった。そして現在では、ブラジル約140万人、アメリカ約100万人（うちハワイ約24万人）、ペルー約9万人、カナダ約7万人など、海外の日系人人口は約270万人以上に上っている。

皇国殖民会社の募集に応じた781人が、笠戸丸でブラジルに渡ったのは1908年のことである。それから今年（2008年）で丁度100周年に当り、熊本県でも昨年からの種々の関連行事が催されている。新聞の記事によれば、笠戸丸での移民者は沖縄県出身者324人、鹿児島県172人、熊本県78人、福島県77人の順となっており（2008年4月27日付毎日新聞）、現在のブラジル在住日系人のうちの熊本県関係者は約14万人で（2008年1月17日付熊本日日新聞）、いずれも約1割を本県関係者が占め、関わりは深い。

その関わりについて、まず紹介すべきは、今もブラジル日系社会で尊敬され続けているという上塚周平（1876—1935）であろう。上塚を顕彰する団体「イッペイの会」会長を務めている米原尋子氏が熊本日日新聞に書いた記事「ブラジル移民の父・上塚周平に学ぶ」（2007年10月9日付）をもとに述べると、上塚は下益城に生まれ、旧制五高から東京帝大に進んだ。在学中から「海外雄飛論」を唱え、卒業

後に皇国殖産会社に採用されて、笠戸丸の第1回移民の輸送監督兼会社代理人として移民たちを率いた。しかし、コーヒーの不作や過酷な労働に対する非難の矢面に立たされたことがきっかけとなり、移民たちと労苦をともにしようと決意した。そして、「一万一千ヘクタールを超える農耕地を造ったが、常に移民のため金策に明け暮れ、心安らぐことはなかった。着る物には無頓着でいつもボロをまとい、屋根から月光が射すあばら家に平気で住み続けた」のである。同紙はブラジル移民百年企画<第2部>として、「上塚周平とその時代」のタイトルで2008年1月28日から2月19日まで連載を組んだ。その第15回「周平逝く」によると上塚に否定的な見解が現在もあるようだが、「しかし、彼は途中で別の道を選ぶことができたのに、逃げることなく移民に寄り添い、青春の志に殉じた」ことはやはり尊敬に値しよう。昨年、彼の出身地である城南町の「火の君総合文化センター」に、彼の銅像が完成したそうである。サンパウロ市から約500km奥のプロミソン市にある「上塚周平公園」にも彼の碑があるという。

『知られざる日本人—南北アメリカ大陸編—』（太田宏人、オークラ出版、2007年）という本には、上塚と同じ下益城出身の水本光任が取り上げられている。水本は1924年に15歳で両親に連れられ一家でブラジルに移住した。耕地での労働、山から切り出した木の炭焼き、法律事務所の雇員などの後、現在まで続く邦字紙サンパウロ新聞の創業社主となり、ブラジルの日系社会に対して大きな影響力を持ち、「日系コロニア（移住地、植民地）の新聞王」と称された。1991年に亡くなったが、死後その業績を記念して、サンパウロ市内の東洋人街の通りに Rua Mitsuto Mizumoto（ミツトウ・ミズモト通り）と命名されたそうである。

『女たちのブラジル移住史』（日下野良武 監修、毎日新聞社、2007年）は、ブラジル移住史において貢献者として顕彰されるのはほとんど男性であるが、女性たちの地味な努力があってこそ、男性たちが活躍できたのではないかと、6人の女性を選び、その体験を綴ったものである。4番目に登場する土田町枝さんも下益城出身。1924年生まれで、1957年に夫と5人の子供とともに移住し、「死んだつもりでこの地球の反対側に来て」、「何度も転んで何度も立ち上がった」。ほかの5人の体験も平板ではない。

高知県出身で外国に憧れ、1956年に夫やその兄夫婦たちと旅立った女性の文章にはこうある。「男という者は、家族に対する愛情よりも、自分を懸ける事業に情熱を傾け、生きがいを求める。犠牲を払わなければならない場合でも、それをやり遂げるための理性と忍耐力は女性の想像以上の強さで立ち向かう。」それに対し、「女は自分の愛する夫や子どもの平安を守るために、鋭い本能を働かせる。感情を捨て去ったのかと思えるほど、理性的に物事を判断する。求めた山に懸ける夫の夢に同調したわけではなかった。」

1973年に、学生時代から南米移住を夢見ていた夫とともにアマゾンに入ったのは山梨県出身の女性。執筆当時にはこのときのことを振り返って、「若さというものは、なんと大胆不敵で、向こう見ずで、愚かさに彩られたものなのだろうか」と冒頭に記す。その後の生活は初期移民ほどではないが、苦勞も多く、「捨てるほどあったのは、緑がこぼれる大自然だけで、現実の暮らしには電気も水道も望むべくもなかったが、そんな苦しい開拓初期の人生に耐えられたのは、ひとえに怖いもの知らずの若さゆえの力であった」。

この本を監修した日下野氏は1943年に熊本県に生まれ、水本光任の起こしたサンパウロ新聞社に入社し、サンパウロでの勤務の後にフリーとなり、現在はブラジル在住のジャーナリストとして活躍している。

◇ ◇ ◇

天沼香氏は、出移民の多い県として、主に経済的な要因からは沖縄県、山口県、広島県、熊本県、福岡県、高知県を挙げているように、ブラジルに限らずどの移民先においても熊本県出身者の足跡がある。（経済的なもの以外の要因として、天沼氏が立てている仮説は興味深い。移民を多数出している地域と佐幕方の旧藩の地域が合致するというもので、御三家や譜代の和歌山県、滋賀県、天領だった長崎県、朝敵となった会津藩と奥羽列藩同盟の福島県、宮城県がその例である。）

『そこに日本人がいた!』（熊田忠雄、新潮社、2007年）を読むと、あちこちに本県出身者が登場する。この本は、よく島国根性と表現される日本人の国民性を、逆に見て、島国だからこそ、より広い世界に憧れ飛び出して行った先人たちを列挙したもの

である。1898年に南アフリカのケープタウンで商店を興した古谷駒平の妻の喜代子は、当時ハワイに多かった熊本県出身の日系移民の2世で、駒平がハワイにいた頃に結婚した。ニューカレドニアのニッケル鉱山へ1892年に移民として渡った600人の全員は熊本県人で、その大半は天草出身者だった。彼らは、わが国初の移民斡旋会社である日本吉佐移民会社の募集に応じたもので、この会社は熊本県内にあった2つの移民斡旋会社を下請として募集を行った。1860年に開港したロシアのウラジオストクとその周辺に住む日本人は圧倒的に九州出身者が多く、1910年の調査では全体で約3100人、うち長崎県が950人、次いで熊本県、佐賀県、福岡県と続きこの4県で6割を超えていたそうである。1904年にマダガスカルにやって来て、レストランやホテルを経営した赤崎伝三郎とチカ子夫妻も天草出身である。

明治時代半ばに、日本人として初めてニュージーランドに住み着いた野田朝次郎も天草出身で、船大工だった父親とともに修理中のイギリス船に乗ったところ、酔っ払いの父親から忘れられてそのまま出航してしまった。船のボーイとして10年間働いた後に、ニュージーランドに住み着いてマオリ人女性と結婚し、苺の栽培で成功して財を成した。該国上陸時に日本に帰ることは諦めており、現地で70歳くらいまで生きた。近年、研究者の調査と助力により、野田の身元と苓北町に住む血縁者が判明し、1990年に親族同士の対面が叶ったそうである。

天草出身の女性の中には、1926年にフランス人の富豪と結婚してラオスとベトナムの国境付近で農園を営んだ鮫島清美や、ラオスにはフランス人の電気技師と結婚して「電気婆さん」と呼ばれた女性もいる。「からゆきさん」と呼ばれる女性たちに関しては、その拠点であるシンガポールからミャンマー、ベトナム、ラオス、インド、スリランカなどに足跡がある。インド洋に浮かぶモーリシャスでも、明治末にここを訪れた新聞記者が出会った4人の女性たちはいずれも天草出身だったという。これらの女性たちの中には、現地で短い生涯を閉じた者も多い。

「異国の日本人墓地の小さな墓石の下で眠るからゆきさんをたずね歩き回った」という開設者（氏名非公表）の「からゆきさんの小部屋」というホームページ (<http://www.karayukisan.jp/index.html>) には、彼女らの墓の調査結果として、その平均年齢

が数え年で21.6歳だったとある。そして、「世界中に広がっていったからゆきさんの数は、20万とも30万ともいわれています」と書いている。後述の「からゆきさん物語」の著者である浜名志松氏によれば、「からゆきさん」こと「海外出稼ぎ女」の分布は、北はシベリア、中国から、東南アジア、南アジア、オーストラリア、アフリカ、アメリカ、カナダなど「アジアの海岸線の重なる港湾都市にくまなく入りこんで」、「シベリアなどの奥深くまで侵入し」、その「足跡は実に驚くべき広範囲にわたっている」。

◇ ◇ ◇

日清戦争にも従軍した熊本市出身の軍人である石光真清（1868—1942）は、三国干渉からロシアの脅威を感じ取り、軍籍を離れてロシア研究のためウラジオストクに向かった。しかし、「私はこの地に留学するについて、特別任務を志願したわけではなかった。しかし歴史の流れ、時のゆきがかりは、疾風のように私を巻きこんでしまったのである。私を馬賊の群に投げこみ、女郎衆を友として、ある時は苦力（クーリー）に、ある時は洗濯夫に、またある時はロシア軍の御用写真屋になって全満洲に辛酸の月日を送ろうとは、夢にも思わなかった」と、手記4部作『城下の人』、『曠野の花』、『望郷の歌』、『誰のために』（中公文庫、1978～1979年初版）に書いている。4冊の中で最も面白く読めるのは『曠野の花』であろう。ここでも、本県出身者がしばしば登場する。例えば同地で、農商務省の練習生であるとともに新聞社の通信員を務め、熊本茶業組合の出張員をも兼ねていた阿部野利恭がそうである。石光がさらに内陸へ向かって、ニコリスクからポグラニチナヤに馬車で向かう山道の隧道工事の現場で出会った40歳位の男も熊本県出身で、真野新吉と名乗るその男がいうには、「明治二十年頃、ロシアの鉄道工事の下請人夫を熊本で募集した時、（中略）同勢三百名と一緒に大陸へ渡った。当時のウラジオストクは草原同様、一隊は徒歩でニコリスクに着き、森林を拓き家を建てて鉄道工事の準備にかかった。馴れぬ土地だったから冬季の穴居生活のため病人が続出して、折角の夏の稼ぎも消えてしまい、手がつけられなくなって明治二十二年に引揚げてしまった」が、彼はロシア人工夫の娘と結婚して居残ったのであった。

『曠野の花』の中で強く印象に残るのは、お花、

お君、お米などの女性たちである。この本によると、シベリアへの日本女性の進出は目覚しく、「ウラジオストックにこの種の女性が現れたのは明治十六年頃と言われ、(中略) 明治三十年頃には、バイカル湖以東の都市で彼女らの影を見ない所はないほどになった。」長崎に生まれたお花こと水野花は、「人の新切とか愛情とかをまるで知らないで育ち」、「明治三十年、ウラジオストックに連れられてきてから四年の間辛い商売を続けて転々と流浪し」た後、ブラゴヴェシチェンスクと黒竜江を挟んで対岸にある愛暉で、馬賊の頭目である中国人の妾となって旅館を経営していた。折悪しく、北京で義和団の乱が起こったため、ロシア軍はこれに乗じてブラゴヴェシチェンスクにいる中国人約3000名を虐殺、さらに黒竜江を渡り、「対岸の清国の都市村落はことごとく焼払われ、その住民は徹底的に殺された」ので、お花の安否は不明となった。1年後ハルピンで洗濯屋を開業していた石光のもとを訪ねてきた男装の客がお花であった。彼女は夫を亡くし、九死に一生を得てたどり着いたハルピンで石光を捜していたのだった。そして、「二度も三度も死んだ私です。密偵になれとおっしゃれば密偵にもなりましょう」と、男装のまま洗濯屋の番頭となり、ロシア軍の満州進出に関する調査で留守がちの石光を手伝った。その後、石光は調査の利便のために写真屋も始めるようになり、洗濯屋の方は在留邦人に譲渡した。その譲渡金を持って、「シベリアか満洲の奥で野垂れ死にするのが定まった運命ですのに、人並みはずれた大金を懐にして、こうして郷へ帰れるのは、全く旦那さまのお陰でございます」と泣きながらお花は故郷の長崎に帰って行ったのである。タイトルとなった「曠野の花」とは、石光が大陸で出会ったお花のような哀れで健気な女性たちを指しているのであろう。「からゆきさん」たちには、天草だけでなく長崎県の島原出身の女性も多かった。

Wikipediaを見ると、石光の弟真臣は陸軍中將となった軍人、妹真津は橋本家に嫁してその孫が橋本龍太郎元首相である。長男の真人は新聞記者となり、石光の手記をここで紹介した4部作としてまとめた。真人の編著書『ある明治人の記録』(中公新書、1971年初版)は、戊辰戦争で朝敵となった会津藩士の五男として生まれて、絶望的な境涯から這い上がり、陸軍大将にまでなった柴五郎(1860—1945)が

自身の少年時代を回想したものである。1872年、柴五郎が逆境から抜け出すきっかけを与えたのが、石光の叔父の、このとき青森県大参事(知事)を務めていた野田豁通(1844—1913)で、五郎の言葉を借りれば「熊本細川藩産物方頭取石光真民の末弟に生まれ、勘定方出仕の野田家に入籍、幕末京都に出て、実学派の横井小楠の門下となり、のち陸軍に入り初代陸軍経理局長、男爵を賜わる。義侠無私の人にて、とくに後進を養うこと厚く、箱館戦争に軍監として活躍、かつては敵軍の将なれども、薩長土肥の閩外にあり、東北各藩の子弟救済に奔走」した。石光によれば、「叔父は戊辰の役に征東大総督府の幕僚として従軍し、会津若松城を攻撃した。同城が陥落後、(中略) 育英事業として会津藩士の子弟から二名を選抜し県庁の給仕として採用したことがあった。その一人が柴五郎氏で」、1882年野田を頼って上京した石光が、遊びまわっていたため、預けられその監督下に置かれたのが、近衛師団砲兵連隊付中尉となっていた柴の家庭であった。そのおかげで石光は無事に陸軍士官学校幼年生徒隊に入ることができたのである。熊本市向山校区歴史文化保存会実行委員会編集『城下の人—石光真清を生んだ熊本の風土—』(2006年)所収の「石光真清を巡る人びと」(井上司朗)には、石光がウラジオストックで出会った阿部野利恭について、熊本学園大学の前身東洋語専の創立者と紹介されている。同委員会は、熊本市本山町の石光の生家に石光真清記念館を開設している(JR熊本駅から徒歩約10分)。

『女スパイ シベリヤお菊』(長谷川僚太郎、文芸社、2006年)には、天草出身で7歳の時に京城の料理屋に売られ、以後大陸を転々とした後、ブラゴヴェシチェンスクで酒場のマダムをしながら馬賊の頭目にまでなった山本菊子(1884—1923)に関する記載がある。菊子はニコライエフスクで病死したが、同書によれば、その3年前に同地で起こった尼港(ニコライエルスク)事件でパルチザンに虐殺された日本民間人347人のうち110人が天草出身者だったという。

◇ ◇ ◇

『新・熊本の歴史7 近代(中)』(「新・熊本の歴史」編集委員会編、熊本日日新聞社、1981年)所収の「ロシア革命とシベリア出兵」(新藤東洋男)によると、熊本とシベリアの関わり合いは深く、その

第1はシベリア鉄道工事、第2は「からゆきさん」だという。鉄道建設のために移民渡航会社の募集に応じた1500人のうち、熊本県出身者は1000人であった。1898年に出かけた彼らは、ウラジオストックから約120km奥地の工事現場で1日14時間から18時間も働かされ、食事も不十分、給料も不払いでとうとう暴動が発生したそうである。

同書所収「からゆきさん物語」の著者である浜名志松氏は、「からゆきさん」とは海外に進出した出稼ぎの女性のことでありと述べている。「から」は中国を意味していたが、後に東南アジアまでも指すようになり、「ばく然と外国のことをからと呼んでいたことから、からに行った女」ということでそのように呼称されるようになった。天草出身の女性が必ずしも多いということではなく、九州を中心に西日本全域から中部、関東、東北にも及んでいる。それにもかかわらず、「からゆきさん」といえば天草出身のようになってきているのは、「多くのからゆきさんの中で、天草出身の娘たちが大胆で俠気があり辛抱強く気宇闊大な面があり、気性の強い女が多かったためではないか」と浜名氏は考える。天草から海外に出て行った女性たちが多かった背景としては、まず地理的に南方文化とのつながりが挙げられる。歴史的背景としては、キリシタン弾圧後に幕府直轄地となり、狭い耕地と年貢取り立てによる食料不足がある。これらの理由から、すでに江戸時代から肥前を主に、肥後、筑前、日向などへの出稼ぎが行われていた。肥前（長崎）は海を隔てて近く、鎖国下におけるオランダや中国との貿易港であり、幕末に開港され海外への開かれた窓口となった。海外出稼ぎの動機として、浜名氏は「若者たちは、男も女も島の生活に絶望していて、何とか生活を開拓しようとする強い気持ちが、内地に向けられず海外に目に向けられた」のであり、「ひと旗あげようとしても国内では困難であり海外ならばく然とではあるが、何かができるのではないか、そんな強烈な思いが抑圧から解放されて明治を迎えた青年男女の心の中にあった」とする。

先に述べた赤崎伝三郎だけでなく、天草から海外出稼ぎで名を成した男性には、長崎に出た後、黒船の機関士となってシンガポールに渡り、広大なゴム園を経営した笠直次郎、ベトナムで大南公司を興し実業界で活躍した杉下光広、オーストラリアで真珠

採取の先駆者となった浜浦伊吉など数多い。女性たちがその機運に乗り、海外に出て金を稼ごうと考え出したのは自然なことで、「からゆきさん」たちもこのような青年たちの中に区別なくある人たちであって、「海外に渡った男女とも共通の目的は富の獲得であり、出稼ぎに行つて財を得、家を建てたり、先祖の墓を建てたり、借財があればそれを返して豊かな生活をしたということが正直な気持ちであったのではないか」と浜名氏はいう。ただし、「一家が経済的危機に陥り、それを救うために娘が苦界に身を沈めることは日本の各地に見られますが、天草の場合もそのケースが多いのであります」として、『サンダカン八番娼館』（山崎朋子、文春文庫、1975年初版）のおサキや、1889年生まれの小松ケイを紹介している。

浜名氏の著作と同名の小説『からゆきさん物語』（宮崎康平、不知火書房、2008年）は、女衞に騙されて島原の口之津港からシンガポールへと渡った一人の老婆の話をもとに書き起こしたものである。小説は未完であるが、宮崎氏が1958年頃に実際に聞いた話では、老婆は「からゆきさん」として苦勞した後、「現地で大成功を取めて財をなした、からゆきさんとしては数少ない成功者の一人だった。」しかし、第二次大戦後に帰国してからは、持ち帰った「莫大な宝石を二束三文に殆どだまし取られて、今は近所の子守りなどをしながら糊口をしのぐ日々となった」。

この小説で、石炭を満載したフランスの貨物船に乗せられたのは、老婆をモデルとした主人公の夏代だけでなかった。船は、「天草の娘二十三人を船首の予備水槽に、島原、天草の娘二十二人を船艙の底に積んで、一路シンガポール」に向かった。それは、1903年のことで、当時、有明海の出口にあり、天草の真向いに位置する口之津港は、三井三池炭鉱の国外積出港として栄えていた。夏代たちは、最初は長崎の料理屋で雇われるという口約束にのつたのだが、騙されて上海行きを了承させられ、結局はシンガポールまで運ばれたのである。長崎出身の著者は、島原からの距離感として、上海と比べると大阪や東京の方がはるかに遠く感じるとして、「戦前における長崎—上海間の船より、長崎—東京間の急行列車の方が時間を要していたことは周知の事実である」と書いている。出国後24日目にしてようやくシンガ

ポールに到着した夏代たち45人の娘たちは、16人になっていた。劣悪な環境で数名が命を落としたほか、哀れにも、予備水槽に入れられた天草の23名は、水漏れした水槽の水を移し替えたせいで、全員溺死してしまった。

夏代は幸運にも、シンガポール政庁でかなりの地位にあるイギリス人男性に落籍され、何不自由のない生活を送ったが、この夫婦同然の2人にとって幸せな日々は、そういつまでもは続かなかった。詳しくは小説を読んでみて欲しい。未完であることが惜しまれる小説である。

◇ ◇ ◇

さて、笠戸丸によるブラジル移民からの100年目は、「元年者」のハワイおよびグアム島移民から数えると140年目となる。人の一生の長さを優に超えるその年月とは実感できないが、どのくらいの長さなのだろうか。高橋幸春氏によれば、ブラジルでは既に日系6世が、天沼氏の本では7世が誕生しているようである。6、7世ともなればもう「日系」といういい方よりも、天沼氏の用いる「ジャパニーズ・アンセストリー(日本人を祖先とする人間)」の方がぴったりくるようである。

『日本から一番遠いニッポン』(三山喬、東海大学出版会、2008年)で、三山氏は取材の出发点となった、沖縄出身のボリビア移民の言葉を紹介している。「いなかやジャングルのような所に生まれた子供たちは、教育もなく土人化している。中には自分の血が日本人であることさえ知らないものもある。考えるだけでやりきれない」と。1899年に佐倉丸で運ばれた約800人の日本人がペルー移民の始まりで、その後も続々と送り込まれる。日本人たちはペルーの海岸線に点在するサトウキビ耕地で、半奴隷のような境遇で働かされた。何とかリマに逃れた人たちは、やがて商売で成功を取めるようになる。(アルベルト・フジモリ元大統領も飽託郡出身の両親を持つ日系2世で、2重国籍を持つ日本人でもあったことは近年話題となった。)

リマに向かわずに、アンデスを越え隣国ボリビアの奥アマゾンに向かった人たちはボリビア移民の始祖であり、その数約2000人とされる。ボリビアでも北部奥アマゾン地方は最も秘境とされているそうであるが、この一帯には今でも日本人移民の子孫が約1万人住んでおり、中には大自然の中で自給自足の

生活をしている人たちもいるのだという。密林の中のそのような小集落(バラッカと呼ばれる)の1つヒロシマを三山氏が再訪したのは2006年のことだった。バラッカは川沿いに点在し、住民はまばらに生ずるアルメンドラという木の1月から3月の雨季に落下する実を拾って業者に売るほかは、穀物や野菜の栽培と家畜を養って自給している。ヒロシマはセルヒオ・ムラカミという日系3世とその下で働く労働者20家族ほどが暮らすバラッカである。ただし、人々の苗字とヒロシマという地名以外には日本的な痕跡はないという。ムラカミは奥アマゾンの日系人の中では成功者の1人で、「土人化」した日系人ではない。彼の祖父は岩蔵という名前の熊本県出身者で、1908年にペルーに渡った後、ここにやって来て現地の娘と結婚した。ムラカミがバラッカにヒロシマと名づけたのは、原爆で日本の市民が大勢殺されたことを忘れないため、少し上流に買った土地にはナガサキと名づけた。

三山氏がそこで出会ったフクヤマという姓の女性は「床板もない労働者住居」に住み、そこには「家具らしいものは、手製のぶかっこうな寝台くらいしか」ない。そして、「戸口の前に置いた椅子に腰掛け、半裸で猟銃の手入れをする夫のうしろで、彼女はべったりと座って赤ん坊をあやしていた。髪はほつれ、だらりと襟ぐりが伸び切ったTシャツは、煮しめたような色をしていた。」「祖父の名は？あなたは三世か四世か？そういった私の質問に何ひとつ答えようとせず、脅えたように夫の背後に隠れようとする。」それを見て、ムラカミはいう。「話そうが話すまいが、結局は同じこと。自分が日系人だということすら、私が教えてやるまで知らなかったんだから」と。

三山氏は、アマゾンの奥地に住み、現地の文化や価値観と「同化」してしまった人たちについて、「同化」という現象は、時間の問題で抗しきれなくなる自然の法則のようなものと結論する。異郷の地に移り住んだ人たちが拠り所とした母国の文化や価値観は、現地のそれと溶け合い、変質し、そして消え去る。この三段階の最終段にまで至った最も早い例が、奥アマゾンの例だと考えるのである。このような変遷に要する時の流れが100年の歳月なのであって、最早「ジャパニーズ・アンセストリー」ともいえないような、いやそのようにいうことに意義

を見出さないであろう人たちである。

◇ ◇ ◇

ここで私が紹介した本や記事の著者は皆そして私自身も、漂流や移民あるいは出稼ぎなどで海外に渡った人たちの、運命に翻弄されながらも異郷の地で懸命にそしてたかにかに生き抜く姿に、いくばくかの憧れと、大いなる敬意を持っている。彼らにとって、日本人であるという意識、日本人としてのアイデンティティは重要な役割を担ったと思われるが、それ以前に、健全なおおらかさと勁い心持ち、豊かな人間性と前向きな姿勢を持ち、さらにいえばジョン・万次郎や大黒屋光太夫たちもそうだったように、柔軟な精神に支えられた人たちであったに違いない。

海外に渡った日本人に関する私の濫読のうちから、記憶に残る人たちについて書いてきたが、特に熊本県出身者には注目を払った。『ディスカバー・ニッケイ』というホームページ (<http://www.discovernikkei.org/ja/>) は「日本人移民とその子孫」という意味の「ニッケイ」コミュニティ形成を標榜するサイトで、関連資料も豊富に揃えてある。その中の「日経移民史百科事典」にある県別移民者数の統計データを見てみると、1899年～1941年までの戦前移民者数では熊本県は広島県、沖縄県に次ぐ3位で68245人、1952年～1993年の戦後移民者数は沖縄県、東京都、福岡県、北海道に次いで5位の4454人である。「早生者（わさもん）」とは熊本県民の県民性としてよく挙げられる性格の1つで、新しい物が好きという意味であるが、海外に出て行った人が多いということは、色々な事情はあったにせよ、やはり進取の気性に富んだ人たちであったとはいえるのではないだろうか。

これら「海外に飛び出した日本人」たちが成功したかあるいはそうではないか、また、故郷に錦を飾ることができたかどうかは一概ではない。しかし、一生を賭した自己の行いについて、今わの際に後悔を覚えた人は少なかったのではないだろうか。

◇ ◇ ◇

余談になるが、最大の日系人口を持つ、ブラジルについて少し付け加えておく。天沼氏の本にもあるように、移民国家のなかで最も人種差別や偏見のない国はブラジルであるとはよくいわれるところであり、「人口の過半数を占める白人中の大多数を占めるポルトガル系白人の有色人種に対する差別意識は、

アングロ＝サクソン系白人のそれと比べると、ずっと希薄だった」から、混血が進み、ブラジルの全人口1億8400万人のうちのヨーロッパ系が5割強であるのに対し、混血の人々も4割弱を占めており、両者の対立関係が見られないそうである。

『ブラジル夢紀行』（桑野淳一、彩流社、2000年）によると、ポルトガル国王の命で派遣されたカブラルによって1500年に発見されたブラジルは、ポルトガル領となった。1549年にサルバドルに総督府が置かれた後は、北東部における砂糖生産のためにアフリカから黒人奴隷が大量に連れて来られた。広大なブラジルは、主生産物の変遷によって、発見当初のブラジルの木（この木の名が国名となった）から砂糖、金鉱、コーヒー、ゴム、工業製品の順で、その生産地を移しながら、発展を遂げてきた。17世紀末から18世紀末にかけては中南部で金やダイヤモンドの採掘が盛んで、そこにポルトガルからの移民によるコロニーが栄えた。19世紀半ばから20世紀半ばにはリオデジャネイロからサンパウロにかけてコーヒー生産が隆盛を迎えた。この時代1850年には、奴隷制が禁止された。アマゾンのゴムが最盛期となったのは19世紀末から20世紀初頭にかけてで、その後はアジアに拠点が移った。ポルトガル以外の入植者（主にドイツ人）が来たのは1808年以降で、日本人移民よりも100年ほど古い。彼らは主に、気候がヨーロッパに似たブラジル南部へと入り、ヨーロッパ（ドイツ）風の町や農村を築いた。現在、南部3州は「ブラジルのヨーロッパ」、「白いブラジル」などと呼ばれている。このように、広大なブラジルは主生産物の生産地が移り変わることによって発展してきたのである。

著者の桑野氏の旅はサンパウロから始まり、サンパウロで終わる。この地を取り上げた最終章に書かれた日本人についてぜひ触れておきたい。笠戸丸が着いたのは内陸部に位置するサンパウロの外港サントス港であり、日本人移民が最初に入った土地がサンパウロの大地だったので、日本人にとっては最も関わりが深い。笠戸丸以前にブラジルに来た、「日本人最初の移民」といわれる人がいる。熊本県出身で判事や弁護士を生業としていた隈部三郎（1865—1926）がその人で、彼は駐ブラジル公使の書いたブラジル移民に関する報告書を読んで、1906年、植民地建設を夢見て一家で渡航したのである。サンパウ

ロ人文科学研究所のホームページ (<http://www.jinmonken.org.br/jinmonken/>)の「物故者先駆者列伝」によると、不運にも彼の夢が叶うことはなかったが、彼は夫人の五百子とともに一男四女の子どもに夢を託し、その教育に傾注した。その苦勞は報われ、2人の娘は最優秀の成績で連邦府師範学校を卒業、直ちに助教員として小学校に勤めた。正教員となるためには、ブラジル国籍が必要であったので、彼女たちはブラジルに帰化した最初の日本人となった。また、ブラジルの中等学校を卒業した最初の日本人でもある。五百子夫人は神奈川県出身で、「青山女学院を卒業し、熊本英学塾の教師もしたこと（が）あり、明治の中葉当時としては最高の教育と教養を身につけていた。」そして、「賃仕事などして夫と労苦を共にし、ひたすら子女の成長を楽しみつつ温かき家庭の主婦ぶりを発揮した。」桑野氏もこの夫人への賛辞を惜しまず、近年見つけたという出帆当時の書信を紹介している。彼女の次の言葉で拙文を閉じたい。

「死なば死ね、生きなば生きよ、ただ行き尽きてその上、事のならば、その折はまた如何ともなすべきよしもあらん」



私の読書歴から

一般科目

八田茂樹

本欄に昨年は鉄道紀行文について書いた。しかし本年また執筆するに当たって思い返すと、結局の所ミステリーが、筆者の一番好きな読み物と思う。なぜなら図書館に行っても、書店に行っても一番親しむのは一般書のミステリー本のコーナーだからである。しかし本欄の主たる読者は本校の学生諸君である。ここでは教育的見地から、筆者が近年に読んできた日本小説を何作か紹介して若い諸君の読書の参考になるようにしたいと思う。また文学の授業ではないので、いわゆる古典ではなく、1990年代から2000年代に発行された作品を取り上げる。

まず伊集院静の『海峡』『春雷』『岬へ』の3部作がいい。伊集院氏は軽妙なエッセイがよくて、何かの記事に、「休日は伊集院氏のエッセイを読む」のが定番となっているとあったが、コーヒーを片手に小春日和の日に読むと格別である。また短編もいい。たとえば『ぼくのボールが君に届けば』や『眠る鯉』などがある。『眠る鯉』では「すぐに役立つ人間になるな。すぐに役立つものは、ほどなく役立たなくなる」（もっと骨太のしゃんとした生き方を）という一節が出てくる。さて前出の3部作であるが、伊集院氏の自伝的小説である。2004年の夏季休業中に読んで堪能した。『海峡』で少年時代を過ごした主人公が、『春雷』で青年期となり批判性を身につけて順調に成長していく過程がみてとれる。『岬へ』では大学生となった主人公の東京の学生生活が描かれる。筆者より少し年配の方の東京の学生生活でなつかしく共感できる場所があった。

次に奥田英朗の『東京物語』。こちらは筆者より少し年齢が下の人の東京での学生・会社員生活が描かれる。奥田氏は岐阜県出身だが、主人公は名古屋出身に設定。70年代末から80年代を描き、キャンディーズの解散コンサートとかあの頃の雰囲気を与えている。奥田氏はミステリーから執筆を開始して、風変わりな精神科医を主人公にした『インザプール』と『空中ブランコ』でブレイクし直木賞を受賞した。少年の成長物語としても読める『サウスパウンド』が映画化された。しかし奥田氏で一番面白い

のはエッセイ風の紀行文ではないかと思う。『野球の国』で藤崎台球場を含めて日本の球場をめぐり、『泳いで帰れ』でアテネオリンピックを観戦して日本柔道に熱狂し、『港町食堂』で長崎の五島列島などの港町をさすらう。

加納諒一の『あの夏、風の町に消えた』。加納諒一にはミステリー作品が多いが、これは大学1年生の主人公のひと夏の冒険・成長物語。新宿の長期滞在者のホテルが舞台になる。同氏の『夜空の向こう』は東京の小さな編集プロダクションを舞台にした物語。

歌手として著名なさだまさしの『精霊流し』。このような自伝的小説が書けたらと思う。短編集の『解夏』。ストーリーテラーとしての面目躍如たるものがある。氏のエッセイ『美しき日本の面影』に「自分だけの桜」を決めておくとよいとあった。毎年その桜に自分の1年を報告に行くのである。

三浦しをんの『風が強く吹いている』。平成19年度の本屋大賞3位の作品（ちなみに1位は佐藤多佳子の『一瞬の風になれ』、2位は森見登美彦の『夜は短し歩けよ乙女』で、どれもよいが個人的には『風が強く吹いている』を推したい。『一瞬の風になれ』は陸上部の高校生、『夜は短し歩けよ乙女』は京大の学生が主人公である）。図書館で借りて読んだのだが、また本屋さんで購入して2回目を読んだ。素人学生10人が箱根駅伝を目指す。非常にストイックな作品。ただ1つの内容上の疑問点は主人公の万引きから始まる点。本としては装丁が悪く、2つの図書館で借りたが、どちらも割れてしまって（うまい表現ではないがまさにこんな感じなので）ページがとれていた（これが自分で購入しなくなった理由の1つでもある）。三浦氏には『まほろ駅前多田便利軒』がある。これで直木賞を受賞している。この作品の読後感も非常によかった（何でも屋を主人公にした作品としては山田悠介の『オール』もよい）。

米澤穂信の『氷菓』。古典部シリーズとして好評な第1作。分野的には青春ミステリーだが、青春小説として読める。高等学校古典部の普通の生徒達が主人公で、本校の低学年の学生にお勧めである。

以上気づかれた方もあると思うが、作家名の五十音順に取り上げた。また青年を主人公にした本が多い。夏目漱石の『三四郎』や森鷗外の『青年』を始めとする明治時代の青年にあこがれに近いものを感

じていた筆者にとって、年齢は重ねてもいつまでも青年気分でいられるのは（気分だけで、それだけまだ未熟であるということか）読書のせいかもしれない。これらの本を休日や寝付かれぬ夜に手にとっていただけると幸いである。

最後に番外編を1つ。湯川豊の『夜明けの森、夕暮れの谷』。釣りのエッセイで、NHKラジオに著者が登場してインタビューを受けていた。装丁もよく、表紙の写真も心をそそる1冊である。

図書館の利用について

情報工学科5年

西山賢志郎

皆さん、最近図書館から本を借りて読んでいるでしょうか。図書館の職員の方々、及び図書委員は、日々工夫を凝らして図書館の利用者を増やそうと努力をしています。（例えば、先日行ったアンケートもその一環なのですが）どうにも利用者は増えているわけではないようです。

確かに、高校の中でもここ熊本電波高専は他の学校に比べてとりわけ図書館離れする要因が多いのも事実でしょう。比較的簡単にそして自由にパソコンが使えるおかげで調べ物などにも図書館で本を利用することは稀ですし、持ち物に対しても他の高校より非常に緩いので休み時間に『暇つぶしに図書館に』という状況にもなり難い。そもそも図書館の立地条件も一～二年生には利用しやすいところがありますが、三年生以降の学生は教室が離れてしまうので足も遠くなるというのも原因の一つかもしれません。

それでも、極力皆さんの要望にこたえた結果、多種多彩なラインナップを誇ることになったこの高専の図書館が、皆さんに十分に活用されていないといった現状は余りももったいないといわざるを得ません。やはり私としてはこれだけ立派な図書館が学内にあるのですから学生のみなさんにはもっと活用していただきたいのです。

きっかけは何でも構いません。最近のドラマやアニメは、既に出版されている本が原作のことが多いですからその原作を探しにきても良いですし、自分の趣味に関する本を見に来るのも良いでしょう。なにとはともあれまずは毛嫌いをせずに、図書館に足

を運んでいただくことが大切です。どうか毛嫌いせずに図書館を利用し、大いに生かしていただきたいと思います。

読書の名言

情報通信工学科4年
小西 遼

公言しよう。私は本が好きだ。いや、大好きだ。本があれば人生は3倍楽しめると思っている。本屋の店員か図書館司書になりたい。でも高専へ入学して別の道を辿るのも、ひとつの幸運であると思う。そうじゃなかったら、きっと私の好みの本で棚が埋まって、店長だか館長だかに怒られるから。

そんな私が、皆さんに10秒で分かる読書法を紹介しよう。そんなに難しくはない。

真の読書法とは何か

答えは簡単である

気分が向けば

書を手にとってこれを読む

ただそれだけのこと

読書を心から楽しむには

気の向くままでなければならない

by 林語堂

ほら、簡単だ。気の向いたときに読む。これぞ読書を百倍楽しむ秘訣。教科書を読んでも楽しくないのは、(先生、ごめんなさい) 気が向かないからに違いない。

もういくつか、読書に関する名言を紹介したい。

書物は青年時代における道案内であり

成人になってからは娯楽である

by コリアー

つまりは若いうちに本から人生という道を学べということ。本は何も箒に乗った魔法使いや、物理学者が事件を鮮やかに解決するばかりではない。伝記や自己啓発本、歌集や写真集など、その種類とパワーは圧倒的だ。インターネットとは歴史が違う。ここから学ぶものがないなんて、誰が言うだろうか。

ところで、あの有名な哲学者のロックはこう語る。

読書は単に知識の材料を提供するだけである
それを自分のものにするには思索の力である

by ロック

思索の力！格好良い響きだ。一冊の本を作るのは、簡単なことではない。著者が何を伝えたくて、何を込めて書いたのか。ちょうど教師と生徒のようなもので、人間という生徒達はそれを吸収する思索の力と感性を秘めている。そして何人もの教師を通して、だんだんとその力を培い、一冊から多くを身につけていく。

ただ、中にはそんなに悠長な時間はない人がいるかもしれない。手っ取り早くその思索の力を身につけたければ、国語科の教官の扉をノックすることをお勧めする。そうでない人たちは、気の向くままに、図書館へ足を延ばしてほしい。図書館は学生の意向を汲み、専門書を充実し、探しやすいように蔵書整理を行っている。新刊図書は目立つように表紙を前に向けられ、手に取られるのを待っている。私たちが使用しやすい環境へと、事務員の方が努力されていることには感謝の気持ちでいっぱいである。

結局何を言いたかったのかというと、あの紙とインクの束の中には、想像以上に知識と魅力が詰まっている。そしてそれを楽しみ、吸収しないなんてもったいない。最後に、この言葉だけ、どこか頭の片隅においてもらえないだろうか。そして少しでも本を読む人が増えれば、本好きとしてとても嬉しい。

身体には鍛錬

心には読書

by アディソン



図書館受付業務を通して

情報通信工学科 4年
稲葉 潤

皆さんは図書館を利用したことがありますか。本校の図書館には専門科目だけでなく、雑誌や新刊本は、ほとんど遅れなく配架されていて、学生のみ皆さんのニーズに合っています。放課後のちょっとした空き時間にでも、ぜひ足を運んでみてください。ただ、利用マナーが悪い方がまれに居られます。共同スペースなので、節度ある利用をお願いします。また、今年度から複写機が導入されました。これも学生の皆さんのニーズに応えたものです。希望図書もかなり配架されていますので、ぜひ学生の声を活かした図書館になるためにも、もっと図書館を利用しましょう!!

図書館での日々

電子制御工学科 4年
金丸 洋平

「図書館の時間外職員募集なる張り紙に釣られ、非常勤職員という名のバイトを始めて早9か月。ただカウンターに座っているだけでお金が貰えてしまうことに対して若干の罪悪感を覚えつつも、何だかんだ言って私は図書館で過ごす放課後の時間を楽しんでいる。大抵は本を読んで過ごしているのだが、そうしていると館内で本を読んでいる人の少なさに驚かされる。かくいう私自身、時間外担当として図書館に通うようになるまで、学校の図書館で本を読むことはおろか、本を借りたことすらなかったのであまり大きな口は叩けないのだが、それにしても少ない。電波の図書館は技術書ばかりと思われているのかもしれないが、実際のところは意外と小説の類も充実しているので、是非とも足を運んでもらいたい。

…と、図書館の宣伝を並べてみたが、やはり図書館を利用しないのは損なことだ。もっと積極的に活用してほしいと個人的には思う。

図書館に携わっての感想

電子制御工学科 4年
松本 匡史

今年度、図書館非常勤職員として受付をしてきた。低学年の頃、あまり図書館を利用していなかった自分だが、高学年になり専門書が必要になることも増えてきた。その中で勤務できたのは幸運だった。制御棟から足を運ぶとなると遠いが、受付をしながら勉強できたりと、有意義な時間を過ごせる。元々静かで良い雰囲気の図書館であるから、集中することも簡単にできる。給料をもらいながら、やりたいこともでき、まさに一石二鳥といった感じだ。また、受付をしていると、学生の立場とは違う見方で図書館を見ることができる。一日の利用者の数、どんな本がよく読まれ貸し出しされるかなど、知らなかったこともわかってきた。テスト期間でなくとも閉館まで勉強する学生の姿も見た。勉強に、読書に、話に、休憩に、十人十色の図書館の利用法を見て知って、何故か少しいい気分である。この勤務、一年間続けられて良かったなど、3月には思えることだろう。

図書館で学んだこと

情報工学科 4年
堀田 将伸

私が図書室のバイトになって一番良かったと感じるのは、「図書室に触れる機会が増えた」ということだと思う。3年間電波高専で学生として過ごして来て何度本を借りただろうか。おそらく二度か三度。片手で数えられる程度のものだろう。そして、それと同じ位に図書館に来る機会もなかった。それが、バイトを経て少なくとも週に一度は来るようになった。そうして見えてきたものも少なからずある。

いつもお世話になっている職員の方々。毎回おもしろおかしく話し掛けてきてくれる。

本を借りに、返しに来る人達。今でこそ慣れたけど最初はすごく緊張していた。

ゲームをしたり、おかしを食べたりする人。いい加減学ぼうね。

普通に生活していてもできないような様々な経験

ができるのも、将来何かの役に立つだろう。これからは私は図書館のバイトを経て、様々なものに触れ学んでいこうと思う。

図書館で得たこと

情報工学科 4年
前村優香

図書室の仕事を一年間手伝わせていただいて感じたことは、面白いということでした。

本を借りる動作1つでも、いろいろな人の内面をのぞけるような気がします。新しい発見がたくさんできて、とても楽しかったです。

どうしてこんなに人が来ないんだろうというくらい人が来ない日もありました。土曜日のテスト期間ではない週などは、きても2、3人というくらいです。それでも、図書館の掃除を試みたり、面白そうな本を読んでみたり、勉強を試みたりなどと、自分の趣味、勉強をすることもできました。

人をたくさん呼ぼうと、どんな本がほしいかを皆で一緒に考えたこともありました。図書室に通っている人はあまり気にしないかもしれないけれど、図書室側からは、一生懸命人を呼ぼうとしていることを切実に感じました。

図書室の仕事は、できることなら来年も続けてやりたいですが、とてもすばらしい仕事なので来年の学年の人たちにぜひやってほしくもあります。力仕事という仕事は特にないので、女性でもできる仕事です。少し遅い時間に帰ることになるので、できれば自宅が学校に近い人がいいでしょう。そして、本が好きなのであれば、最高の仕事です。

来年は、利用する側として図書室に沢山来たいと思います。

図書館に勤務しての感想

情報工学科 4年
安武真美

図書館とは、ある時は安らげるホームのような場所であり、ある人にとってはステージの上にいるような緊張感を孕む場所でもある。

その場所に一年間携わるにおいて一番気を配ったのはこの絶妙な緊張感をどう維持するかであった。しーんと静まり返り、こしょこしょと談笑が交わされ、またしーんと静まる。

この空気は誰かが「空気を読まずに」べらべらしゃべりだせば壊れてしまうが、保たれている間は背筋のピンと伸びる、自然とささやきのトーンを落とさせる空気である。なので仕方なく度の過ぎる談笑やゲーム機の使用は丁寧にお帰りいただいた。とはいえ、大多数が素晴らしくマナーの守られた利用者ばかりであったことを一年を振り返ってうれしく思う。

あと何故か私が担当した本は出口のセンサーに引っ掛かることが多かったのだが、このアクシデントさえも今は良い思い出である。



第30回 校内読書感想文コンクール!

本年度の校内読書感想文・作文コンクールを行い、下記の作品が入賞となりました。
来年度も校内コンクールを実施予定です。たくさんの応募をお待ちしております。



選考結果及び作品紹介

読書感想文

区分	作品名	学年組	氏名
最優秀作	『夜のピクニック』を読んで	1年4組	水間海帆
優秀作	日本人達とポルトガル人の司祭が神の沈黙に見たものから考える信仰に大切なもの	1年3組	伊豆丸直明
優秀作	野火	2年1組	諏訪久美子
優秀作	ドミノ	2年1組	野口裕華子
優秀作	螢川	2年3組	高村優
佳作	「人間失格」を読んで	1年1組	西村仁
佳作	零の発見	1年2組	木村慎
佳作	「コンコルドの誤り」を読んで	1年2組	梶永拓
佳作	「零の発見」を読んで	1年4組	田口景織子
佳作	人間失格	2年1組	石橋和也
佳作	人間失格	2年1組	岩瀬史樹
佳作	恋に恋する	2年3組	田平輝
佳作	『蒼天航路』を読んで	制御情報システム 工学専攻2年	家入友希



高校生活最後のイベントである「歩行祭」。一晩かけて80キロを歩き通すという過酷なこの行事で、甲田貴子は賭けをした。今まで誰にも言えなかった秘密を清算するために。人と人との不思議なつながりや、今この瞬間にしか出来ないことなどに思いを馳せ、親友達と語りつつ、貴子だけはその賭けに胸を焦がしていた。かつて共に歩いた親友からの葉書、奇妙な少年との出会い、そして夜の歩行祭が、貴子たちに魔法をかける。

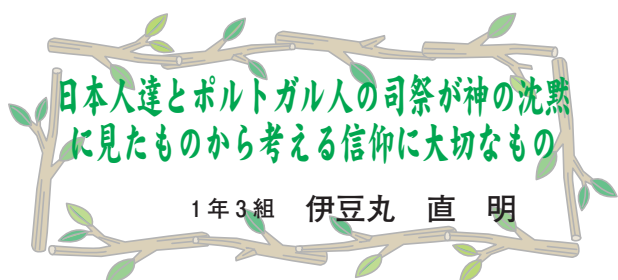
この物語で一番心に残った場面は、最後の自由歩行で、貴子と西脇融が会話をするところだ。長い間、お互いに理解しあいたいと思うが近づくことさえなかった二人が、話をし、お互いのこと、自分のこと、家庭のことなどを理解していく。甲田貴子と西脇融は、異母兄弟として生まれた。父の葬式で初めて出会った二人、特に融は相手を拒絶していた。それから3年、同じ学校、同じクラスにいながら二人はほとんど口を利くこともなかった。そんな二人が、親友に押され、葛藤を乗り越えて今までの境遇について会話をする。そんな中で、私はこの登場人物たちに高校生らしからぬ大人びた一面を感じた。「他人に対して細やかな気遣いをし続けること」、「何かするとか文字通り何かあげるとかのプラスの優しさではなく、何もしなくてくれる優しさ」など、今の私には欠けていることである。しかし、その優しさを受けたことはある。中学校2年生の時のことである。友達と喧嘩をして、ずいぶんつらくあたってしまった。私はそのことを思い返しては自己嫌悪に陥り、頭を悩ませていた。母は、そんな私のそばに、何も言わずにいてくれた。言葉を投げられるだけで壊れてしまいそうに傷ついていた私にとって、無言だが、優しい目で見守り、そばで支えてくれる存在が嬉しかった。今の私には、とてもではないがそのようなことはできない。それは、私がまだ子供だからだ。体だけでなく心が子供なのだ。足し算、引き算の優しさだけしか考えられない、他人のことを深

く思いやることができない。体が大人に近づいていても心が子供というのが、今の私を形容するのに一番の表現だろう。だが、上で挙げた大人の優しさを理解し、実行できたとき、私は大人の入り口をくぐる事が出来ると考える。

また、早く大人になりたい、その一心で脇目も振らずに急ぐ融に対して、親友の戸田忍が言った言葉が印象に残っている。それは「あえて雑音をシャットアウトして、さっさと階段を上りきりたい気持ちはよーく解るけどさ。雑音だってお前を作ってるんだよ。雑音はうるさいけど、やっぱ聞いておかなきゃいけない時だってあるんだよ。このノイズが聞こえるのって今だけだから、後からテープを巻き戻して聞こうと思ったときにはもう聞こえない。」という言葉である。実は私も、融のように、早く大人になって立ちたいと思っていた。これまでの道のりがもどかしくてもどかしくてやりきれなかった。しかしこの言葉を見て、私は、もったいないことをしたと思った。今しか見えないもの、聞こえないもの、体験できないことを閉め出し、今の自分を作っていたであろう何か永遠に失われてしまったと思った。この雑音が意味するところは、文章中の言葉を借りるならば、「青春の揺らぎ」や「煌めき」、「若さの影」だろうか。それらは、今の自分を作る何かになるはずだ。たまにうっとうしくなったり煙たくなったりすることはあるけれど、そんな感情を味わうことだって今だけだ。「今は今なんだと。いまを未来のためだけに使うべきじゃないと。」という言葉があるが、まったく同意見である。今という貴重な時間を大切に、後悔がないように生きる、その過程で、きっと未来につながるが出てくると思う。

私はこの本を読んで、青春についてや、大人になるとはどういうことを考えさせられた。新しい道を進むにいたって、そのようなことを考えることが出来たのは良かった。今までは、大人について深く考えたことはなかった。なぜなら、大人のイメージを勝手に決め付けていたからだ。一見きちんとしていて偉そうにしても、中身は相当杜撰で醜い。確かに世間にそういう人はいるだろう。だが、そうでない人もこの世の中にはたくさんいる。自分の考えを持って、毎日を精一杯生きている立派な人がたくさんいる。私は、そういう人になりたい。

私はこれからの人生に、本当の大人を見つけていきたいと思う。



この『沈黙』を読んで私はキリスト教に対する考え方が変わりました。私は、それまで「キリスト」は人々の全ての罪を背負う者としてしか考えていませんでした。しかし、これを読んだ今では、「キリスト」は、ただ、罪を背負うという訳ではなく、信じる者の背負っている苦しみを共に分かち合う者だと考えています。

何故、このような考え方になったかという理由は、「司祭」が奉行につかまり、絵踏みさせられるシーンにあります。日本にやって来た「司祭」は、絵踏みさせられるまでに、多くの日本人が殉教のために悲惨な死をとげました。そして、「司祭」は、神が何故これ程多くの信者の惨めな死を見ながら、ずっと、沈黙を保っているのかを考えるようになります。しかし、「司祭」が、奉行に捕まった信者を救うために「転ぶ」とき、踏み絵に描かれた「キリスト」を見て、「司祭」は、「キリスト」は見て見ぬふりをしているのではないと考えるようになります。それは、踏み絵に描かれた「キリスト」の表情を見たからです。「司祭」がみた、「キリスト」の表情は、哀しみに満ちていました。実際は、多くの人に踏まれたために顔の部分がすり減りそうに見えただけです。しかし、絵を踏もうとしていた彼には、「キリスト」が自分の痛みを分かち共に苦しんでいるように見えたのです。結局、彼は、背教しました。彼は、教会を裏切りました。しかし、彼は、自分は「キリスト」を裏切ったわけではないと考えています。私もそう思います。彼は、背教をしなければならない苦しみすらも分かち合ったからです。

そして、私が次に考えたのは、殉教するために散っていった日本の村人たちです。私が彼らに対して感じたのは、何故、そこまでするのかという疑問でした。宗教というのは、本来、人々を救うもので

はないのだろうかと感じました。仏教は、信仰することで、死後、極楽浄土（天国）へ行ったり、亡くなった親族等を極楽浄土へ送ったりするためのものだと思います。キリスト教も私はそこまで詳しくありませんが、祈り、救いを求めるものはずです。

しかし、彼らはどんなに信仰しても現代では考えられないような想像を絶する苦しみを味わっただけではないでしょうか。

だとすれば、彼らはいったい何のために信仰しているのでしょうか。人々は死に、神はただ沈黙を守る。彼らは信仰を貫き殉教し、本当にパラソ（楽園）にいけたのでしょうか？達成感のないただの苦しみの中で彼らは救われたのでしょうか？

この文章の中に、キリスト教はそれを貫く強い意思が伴わなければならないとありますが、私は、それは平和の中で唱えられる絵空事のように感じました。この本の登場人物であるキチジローは、何度も背教し、パードレ（司祭）を裏切っていますがその後、司祭に自分も平和な世なら立派な信者になったはずだと言っています。その通りだと思います。どんなに臆病な人間も、また、どんなに強い人間も、立ち向かわなければならない壁が無ければ同じように平和に過ごせるでしょう。実際、キチジローの言葉に司祭も納得しています。

これらのことから考える私の考えは、教え等の規則云々を守ることよりも、唯、神を信じるのが宗教では大事なのではないかということです。殉教しても人が救われなければそんなものに意味はありません。「信じる者は救われる」という言葉がありません。どんな立場に立たされようとも、唯、信じ続けることが大事なのだと私は考えます。

例えば、この本に出てくる司祭は救われています。背教したにもかかわらず救われています。彼は、この日本で、この日本だったからこそ、彼なりの悟りを開き、ずっと疑問に思っていた「キリスト」が「ユダ」に言った事の意味も彼なりに解釈しました。彼は、「キリスト」が「ユダ」に「なすことをなせ」と言ったのは踏み絵を踏んだ彼の様に「ユダ」もまた苦しんでいたから「ユダ」にも「やりなさい」と言ったのだと解釈しています。彼が救われたのは、彼なりにずっと「キリスト」を信じ続けてきたからなのです。

規則に縛られずに信じる姿が、ここにあると思

ます。彼は、他人の目や規則に縛られずに、己の中に確固たる信心を持っていました。

前述のことも含めて私がこの本から学んだことは、どんなことでも、ゆるがない自分の考え、意志を持つことです。意固地になったり、人の意見に耳をかさなかったりするのとは違います。自分が動くときの土台となるものことです。

つまり、この場合は、この中に神と信仰が入ってきます。彼等、信仰者は教えにもとづいて行動しています。それは、彼等が教えというものを教えの中心としているからです。この二つの考えが信仰に大切なのだと私は考えます。



以前読んだ新聞での戦争体験者の話に「戦争は狂気の沙汰だ」という言葉があった。私は、この作品を読み、まさしくその通りだと感じた。戦争がもたらす様々な害の中で最も恐ろしいのは大砲を持った戦車とか、原子爆弾が作られることではなく、その根幹にある人間道徳をねじまげてしまうことだ。戦争という狂気が全てを巻き込み、兵士たちにとっては「やらなければやられる」という状況を作り出す。そして、その中で「人間」、つまり人としての理性や尊厳を保ったまま生き抜くことがどれだけ難しいことであったか。この作品を読んで私は、そのことについて深く考えさせられた。

主人公の田村一等兵は、敗北が決定的となったフィリピン戦線で飢えて彷徨ってる。彼は平凡な中年男であったが、彼の体験は、戦争を体験していない私達からすればかなり異常であった。変貌をとげた屍体、飛び交う銃弾。そして、その異常の最たるものは、極度の飢えの先にあるものだった。彼は草も山蛭も食べた後、発狂し死ぬ寸前の将校と出会う。将校は、「俺が死んだら、食べてもいいよ」と死ぬ間際に言った。このときの田村の心理がどのようなものであったか、私には分からない。あまりにも自分のいる日常とかけ離れているからである。友

軍でさえ食物になり得る。その状況に私は恐ろしさを感じながら読んでいた。

結果、彼は食べなかった。剣を抜いた右手を、左手が止めたのだ。この時の彼の左手はまさに「理性」であったと思う。彼は、かろうじて人間を守ったのだ。この出来事が、彼の分岐点ではなかったかと私は考える。ここで思い止まったからこそ、田村は人肉常食者、永松に怒りを感じる資格があり、打ち殺したのだと思う。

かつての仲間であった安田や永松が人肉を食べるのを読み、私は初めこの二人を「悪」と定義づけるかのように読んでいた。しかし、何度か読み返すうち、「悪いのは彼らではないのだ」と思えてきた。彼らもまた、戦争という狂気に巻込まれた被害者なのだ。だから私は、この作品の根本は人肉食の是非ではなく、やはり戦争に対する批判に行き着くと思う。

私は、正直今まで戦争を題材とした文学を遠ざけてしまっていた。殺し合いや屍体の描写を、実際のこととして想像するのが辛かったからだ。だから、この作品を読むのもためらいがちであった。

しかし、戦後60年あまり過ぎた今、この作品を読んで考えを改めなければならないと感じた。この作品は、様々な屍体のようなすや辺りの風景、そして人間嗜食という目を背けたくなるようなことがらを精密に描写することで戦争をより「リアル」に伝えようとしているのではないだろうか。私達は幼い頃から「戦争はいけないこと」という認識はもっている。だが、飽食の時代に生まれた私達は、ただ表面的に歴史の一つとして考えてしまっている部分があると思う。そして、もし私達の世代が戦争について真剣に考えず、ただ漠然と「駄目なんだ」と認識してしまっただうなるか。おそらく、語り継ぐことができないだろう。戦争を体験していない者が後代に語り継ぐのが、一番難しいことだと思う。そしてそれに失敗すれば、いつの日か惨劇が繰り返されることになりかねない。私達は、戦争の恐ろしさにふたをするのではなく、常に向き合っていかなければならないのである。

そして、この作品でキーポイントとなるのが「野火」だ。田村は比島で空高くにのぼる野火を見、そしてその映像は彼の記憶の奥深くに鮮明に残ることになる。異国にいる歩兵にとって、野火は敵の存在

を示唆する。私はその作品において、野火は冷たい戦火であるように感じた。静かに燃え、細く長く空に昇ってゆく野火と、飢え、衰弱して死にゆく人々の姿が重なる気がした。あるいは死んだ人が天に召される煙だったかもしれない。弔いの煙だったのかもしれない。

私達非戦争体験者に求められていること。それは、戦争体験者の話に積極的に耳を傾け、けして繰り返してはならないと心に刻むことに他ならない。戦後60年、百年、千年。何年たっても、昭和20年が終戦の年であり新しい戦争が終戦の年であり新しい戦争が起こらないようにするには、伝えてゆくことしかないと思う。



「人生における偶然は、必然である。」私がこの本を読もうと思ったのは、以前より恩田陸さんの作品がとても好きだったからだ。また、今まで私が読んだ本に「夜のピクニック」や「ネバーランド」「光の帝国～常野物語」などがあるが、この「ドミノ」は恩田陸さんには珍しい「スピード感溢れるパニックコメディ」となっているらしく、とても興味がそそられた。

この物語の舞台は現代日本の東京で、登場人物は27人と1匹。1億円の契約書を待つ、締め切り直前の保険会社の社員達。オーディション中下剤を盛られた子役の少女。推理力を競い合う大学生たち。来日中の映画監督とそのペット。待ち合わせ場所に行き着けない老人。老人を迎える警察OBの俳句仲間たち。別れを画策する青年実業家とその従妹。東京駅爆破を企むテロリストたち。初めは見知らぬ者同士だったはずのこれらの人たちが、ほんの些細な偶然からお互いに交差し、もつれ合い巻き込まれながら、だんだんと舞台は東京駅へと絞られていき、ドミノのように次々と倒れてゆく。

そして、このいくつかの場面の中から、私が最も考えさせられ共感できた場面をあげようと思う。

舞台「エミー」のサリ役のオーディションを受けに来た少女、鮎川麻里花は強力なライバル、都築玲菜の母親に下剤を盛られ、最悪な状況で実技を含めた面接を受けなければならなくなる。

「なんて卑怯なんだ！」と私は思った。自分の娘に勝って欲しいという母親の気持ちは分からなくもないが、だからといって他人を傷つけてまですることではない。それに、例え受かったとしても、その事実を知った娘はとても悲しく惨めな気持ちになるだろう。もし、私が母親だったら、きっとこんなことは出来ない。

しかし、この後結果的にはこのことが違う方向に働き、麻里花はオーディションに合格する。玲菜の母親はこうなるとは思いもしなかったはずだ。自らがしたことが裏目に出ることだってあるだろう。それはその者を反省させるいい機会になる。それが相手を傷つけるような悪いことだったのなら尚更である。私はこのときとても良い気分になった。やはり、ずるをしたり、勝つためならば手段を選ばず誰かを傷つけてもいいという考え方ではいけないのだ。

私は今まで勉強というものを自分なりに精一杯頑張ってきたと思う。私が中学3年のころのことだが、定期テスト前に隣の席の男子と他の男子が「隣が頭がいいと助かる。」だとか「いざとなったらチラ見する。」などという会話を聞いて、かなり苛立ったのを覚えている。人の努力をカンニングという卑怯な行為で盗むのは、本当に信じられないと思った。その会話が冗談であったとしても、本人を目の前にして言えば傷つくかも知れないのに、そういうことを平気で言っていたので私はかなりショックを受けた。

それらのずるい行為は、自分のためであれば、そのされた相手を傷つけ、それがばれたとき自分へとその見返りがやってくる。自分が思う誰かの為であってもされた相手は傷つき、自分だけでなくその思い人にも見返りがくるだろう。そして、見つからなかった場合も、罪悪感だけはいつまでも付いて回るだろう。ここで、罪悪感を感じない者もいるかもしれない。相手を傷つけると分かっていること自体悪いことなのに、した事を反省もせず「まあいいだろう」程度で片付けることは本当に最低なことである。罪を感じることはせめてもの償いであろう。

この世の中に「ずるいことなど一度もしたことが

ない！」と言える人間がどのくらいいるのだろうか。現に私も堂々とそう言えるわけでもない。しかし、自分の為に故意に人のことを傷つけるような卑怯な人間にはなりたくない。勝利を得るためには自ら努力し、思いやりを持ち、決して人を傷つけない。そういう心の強い人間でありたいと私は思う。



私が『螢川』を読んで一番心に残ったことは、各登場人物の運命の決着である。この小説の中では2人の登場人物に死がおとずれる。一人は主人公・竜夫の友人の関根圭太であり、もう一人は竜夫の父である重竜である。どちらも竜夫にとって大切な人物であったためその死は竜夫に大きな衝撃を与える。竜夫の困惑しながらも成長していく姿が描かれている。

関根は竜夫の友人であり同じ女性が好きな恋のライバルでもあった。しかしその性格は対照的で、何も包み隠さず話す関根に対し竜夫はその思いをなかなか話せずにいた。関根は竜夫もその女性・英子が好きであることを知り、「友情のしるし」として盗んだ英子の写真を竜夫に渡す。その翌日関根が用水路で死亡しているのが見つかり、竜夫に大きな動揺を与える。

昨日まで話していた親友がいきなり目の前からいなくなった時の気持ちは計り知れないものがある。その関わりが深かった程、思いやりが深かった程竜夫の悲しみは大きかった筈である。私が家族や友達を急に失った時のことを考えてみたが、その人物が自分の中でいかに大きい存在だったか改めて知ることになった。自分の中で何かの消失感隠せないものになるだろうし自分の生き方にも何かしら変化を持たらすはずである。また、用水路にいた蝶とのやり取りからも竜夫の悔しさが窺える。用水路には関根の代わりにその蝶がいて、関根は竜夫の手の届かない所にいることが分かる。鳶の円運動は揺れ動く竜夫の心情を表しているのだろう。

一方重竜は竜夫との会話の最中に倒れ、病院に入院することとなる。重竜には現在の妻である千代の前に春枝という先妻がいて、千代にも先夫がいた。千代には子供がいたが親権は先夫が持ち、重竜には子はいなかった。重竜の容態は目に見えて悪化し、静かにその生涯を閉じる。

重竜の病状の悪化の中で竜夫は「死」ということ、「しあわせ」ということに不安を感じ始めている。銀蔵の言った「息子が大きくなって、それからしあわせになってから死ぬがや」という言葉と今の現実食いは違っているからだと思ふ。重竜が息絶えようとしている中で竜夫は自分自身はまだ「しあわせ」になっていない、そもそも「しあわせ」とは何だろうと考えるようになったのだろう。若い竜夫にとって「死」というものすごく具体的で直感的な事柄と「しあわせ」という非常に抽象的で曖昧な事柄に同時に直面することは難しすぎたのだろう。私はどうしても欲しかった物が手に入ったりおいしい物を食べることができた時にしあわせを感じる。しかしここでの「しあわせ」とはそんな一時のものではなく、人が成人し、働き、家庭を持つといった人間的な「しあわせ」であると思ふ。竜夫の中で漠然とした「しあわせ」の象徴である英子。その英子を取り合った仲である関根。竜夫は関根の死を受けて、自分一人だけが、「しあわせ」を得ることに對し迷いを感じているのかもしれない。

その後銀蔵は幼い日の竜夫との約束を果たすため皆を螢狩りに連れていくことを決める。竜夫・英子・千代はそれぞれの思いを胸に出発する。螢を目指して歩いていくなか時間を気にし始めた頃に「1500歩まで歩き、それで出なかったらあきらめる」ということが決まる。500歩も歩かないころ一行は螢の大群に出会う。

千代が「1500歩まで歩き、螢が出たら大阪へ行き、出なかったら富山に残る」というかけをしたのは、これからの自分の人生や竜夫の将来に希望を持ちたかったからだと思ふ。竜夫も千代も大阪に行きたくなくてもいずれは行くことになることは予感している。しかし竜夫の「しあわせ」を願う千代にとって住み慣れた地を離れることは決心のつきかねるところだったのだろう。そんな中螢の大群は現れた。千代の失っていた希望が再び湧いてくる様子は「何もかも嘘ではなかった」という言葉からも分か

る。三味線の音は千代の最も「しあわせ」だった時をも思い出させ、竜夫の「しあわせ」を予期しているかのである。商売も繁盛して何不自由ない生活をしている春枝もその人生に満足はしていなかった。裕福な家庭の長男である千代の先夫も満足はしていなかっただろう。これを見ると大森の言っていた「運」という言葉が思い出されるのと同時に、「しあわせ」を掴むことの難しさを知るのである。

螢の大群が死にながら輝いている情景は本当に見たかのように私の脳裏に焼きついている。その輝きは希望を与え「しあわせ」を掴む意欲を与える。それは螢も人も同じであると思う。「命には限りがあるから輝ける。」誰かが言っていた気がする。私も限りある人生の中でその輝きを目標として生きていきたい。



「自分は、極度に人間を恐れていた」

これは『人間失格』の主人公、大庭葉蔵の言った一言である。私は、この男の一言がよくわかる。

なぜなら私には、人間を恐れていた時期があったからだ。

それは、中学1年生の夏、私はバスケットボール部に所属していた。その部活中で、ちょっとしたいじめ（仲間はずれ）にあっていた。私は、小学生の頃からバスケットボール部で、その頃からいじめはちらほら受けていた。しかしそれは、十分耐えきれものだった。中学生になると、部活内で新しい友達もでき、これなら大丈夫だと思っていた矢先、またいじめにあいはじめたのだ。いじめといっても、最初は、陰口くらいのもので特に気にしていなかった。ところが、そのいじめも段々エスカレートしていき、暴力とまではいかなかったものの試合中のラフプレーなどによって私の心は死んでいった。

そして、部活を止めた。

それからというもの、たとえ仲の良かった友達が話しかけてきても（どうせこの人間も私のことを屑

としか思っていない）と、完全な人間不信に陥ってしまった。そして、人の中には無神経な奴もいるもので「なぜ部活を止めた」などと、人の心のドアを蹴破って入ってくる。しかし、人間をどん底に突き落とすのも人間なら、その底に蜘蛛の糸を垂らし、救い出してくれるのも人間である。

2年に上がり気力もなく、屍になっていた私を救ってくれたのは友達の「大丈夫？」の一言だった。それまで話したこともなかった人が気にしてくれている。それは、無視され続け、人を信じれなかった私を救うのに十分すぎる一言だった。

この『人間失格』の葉蔵は、人間に恐怖しながら、自分の周りに壁をつくり道化を演じることで、

「わずかに人間につながるができる」というふうに言っている。

このことから葉蔵は自分を人間とっていないのではないか……だから『人間失格』なのではないかと思った。

また、この物語のなかで、葉蔵のまわりには、いつも違った女性が描かれている。

それは、全員よい心の持ち主だ。少なくとも、葉蔵にとって「不可解な人間」ではなかった。しかし葉蔵は、何回も女性から逃がっている。

「弱虫は、幸福をさえおそれるのです」

家族や友達を恐れて育った大庭葉蔵は、実は普通の人達の幸福に憧れていたのではないかと思う。しかし『人間失格』では、葉蔵は幸福に触れることができず、ついには施設に入れられて終っている。こうなったのは、葉蔵のせいだけではないと思う。

例えば、葉蔵がよく行っていたカフェのオーナーであったり、はたまた家族、一緒に左翼活動をした友人など……とにかく、葉蔵に関わったすべての人たちの影響によってそういう結果になったということだ。

作者がこの『人間失格』で伝えたかったこととは、人間の恐ろしさではなく、すべての人間が何かに必ず影響を与えるということ。つまり、人は一人では生きてはいない。誰かに支えられ、また、支えて生きているということだと思う。

勝手な意見だが、最近の「自殺」というものについて人に聞いてみると、ほとんどの人が自殺はいけないというだろう。もちろんそれが世の中の常識だし、公共の場ではそういうのが正しい。

しかし、「自殺」というのも人生の選択肢の一つだ。誰にもその選択を止めることはできない。

だが全ての人間が全ての人間に何かしら影響を与えて生きていると考えた上での行動をするべきだと考える。また、自分も常にそういう考えを持って行動しようと思う。

しかし、人間というのは間違えることがある。たとえ、頭ではわかっている、自殺したり罪を犯したりしてしまう。その原因は、心の傷だと思う。前にも、すべての人間が何かに必ず影響を与えているといったが、その誰かが誰かに与えた心の傷が原因で罪を犯し、その罪を犯した人が原因で被害者に傷が生まれ、また……というふうにエンドレスになっていく。

このエンドレスを止めるのは、その心に傷を負った人たちの、家族や友達などにしかできない。

人は、自分が知らない所で人を傷つけるが、人を救っている。

何気ないちょっとしたやさしさによって、人は救われるのだ。

『人間失格』は、そういった人間の繋がりを考えさせる本だった。



私がこの本を読んで考えに走ったことは、ヨーロッパ人が零という記号を考えつかなかったのかということで、そのことについて自分なりに考えてみようと思った。私が思うにヨーロッパ人は考えつかなかったのではなく、考えることをこぼんだのではないのかと思ったのだ。どういう意味かという王政だったころにもともとあった「1」という記号が数字のなかで最もはじめの数であったというところにある。王は自分のことを一番であると認識していたので、それ以上の数字である零を嫌ったのではないかと思った。

次に思ったことは、もし今の世の中に零がなかったらどうなるのであろうかということである。まず、

本書でも書いてあったように、コンピューターは「0」と「1」で、できている二進法なのでこのコンピューターは存在しない。となると今身の回りにある電化製品も、存在しないのだ。こんなにもにあふれていない世の中なら世界はここまで成長はできないだろう。つまり零がなかったら、人類はここまで成長はできなかったということである。「0」という記号を意識することがなくなった今の世の中にほかにも零のようなこの世をつくりあげたキーアイテムがまだまだあるのかもしれない。そして、それらに気づかない私たちのこの無関心さを見直さなければならぬ。そこには、いまある数え切れない量の問題の糸口があるかもしれない。

零の登場でつくられたものの中で算数に関連するもっとも身近にあるものがある。それが、小数なのだ。小数の登場で零により近い数字をつくれるようになったのと同時に、零に近づくことはできなくなったのだ。それならばどうして、小数ができたのかというと、整数だけでは比べることができない場合があるからだ。昔から数え切れないほど人間はたくさんものを比べてきた。その中で1より下は比べることができなかったのである。しかし、零の登場によりそれらの問題はすべて解消されたのだ。そして、理科においてもより正確に結果を残せるようになった。実験による結果はちょっとした違いでも、実験結果に違いが生じるのであるから。

ここで、本書にもあった循環小数について考えてみる。初めて「0.999……」は「1」であると書いてあったのを読んだときは理解することができなかった。しかし、何度か読んでいくうちに理解することができた。そのときは本当に感動した。なぜなら、数字に矛盾はないと思っていたことが見事に打ち砕かれたからである。このとき私はあることに気がついた。それは、この矛盾を平気で見過ごしていたということである。なぜここまで気づくことができなかったのだろうか。やはり、私自身の日ごろの観察力が欠けているのだろうか。それにしても、上で述べたようなちょっとしたことに気づいて、すばらしい成功を収めてきた人は何人もいるだろう。こんなにも新しい発見をしようとしているのに、もしかしたら新しい発見を望むあまりに先ばかり見すぎて、灯台下暗しになっているのかもしれない。

ここでまた、零について考えると零の発見は今考

えてみると、雲をつかむような話だったのであろうと思う。なぜなら、零は無であり存在していないからである。零には個数がなく、「0個」くださいと言っても受けた方は何もできないからである。存在しないものを発見するという試みはなかなか思いつくことでもなく、なかなかその気になるものでもない。しかし、現に今この世に零があるのだから、やはり零を考え出した無名のインド人はすばらしい。もし、この世に生きていたら、その人は確実に無名ではなくなるだろう。零という記号をめぐって南アジアからヨーロッパまでの数百万kmの道のりを渡った人類発展の記号は無であるからこそ、そのすばらしさを忘れられてしまったのだらうと思った。

ここまできて思ったことがもう1つある。それは、零は先頭の位につくことはできないかということである。私は自分なりにこのことについて考えてみた。すると、あることが頭に浮かんだのである。それは、零は無であり存在しないということである。私なりの結論からいうと「1」であっても「6493」であっても実は「000...1」や「000...6493」のようにさきにはちゃんと零があるのではないかということである。そして、零は無であり存在しないのでただ書かれていないということだ。しかし、零が先頭につくときもある。それが小数ということだ。

この本を読んで思ったことはたくさんあった。まず、はじめに何気なく使っている零は実は人類に大きな影響を与えたということ。そして、小数と分数は同じ数でも違っていたということ。この本はそういう普段目に付かないことを気づかせてくれる本であった。



「過去における投資の大きさこそが将来の行動を決めると考えることを、コンコルドの誤りと呼ぶ。」

初めて知ったこの言葉。親でさえも初めて聞いたと言った言葉だったが、実はそれなりに有名な言葉らしい。高校の教科書に載っていたこの評論は、こ

れから先の自分の人生で常に考えておかなければいけないことだと感じた。

春休みも終わりに近づいた頃、まだ終わらせていなかった読書感想文という難題を終わらせるべく、新しくもらった高校の国語の教科書をパラパラとめくっていた時のこと。ふと見つけたこの評論は、考えれば当たり前のことだが、それができない、人間の考え方について詳しく書かれていた。

このコンコルドの誤りという言葉は、そのままズバリ、あの超音速機「コンコルド」が由来である。

イギリスとフランスの共同開発で作られたこのコンコルドは、開発の途中に、たとえそれが出来上がったとしても採算の取れない代物であることが判明してしまっただけで、よってコレを作り上げて所詮使い物にはならないのだが、英仏両政府は「今までの投資が無駄になる」ということを理由にそのまま開発を続けた。完成したがその結果はやはり使い物にならない。採算が取れず結局大損である。と、このように書いてあった。自分を振り返り、思い返してみると、まさにその通りだと思うことが出てきた。

身近にある例としてあげるなら、UFOキャッチャーなどがいい例である。

中の商品が欲しいと思い、お金をいれて始める。商品がそのとき数回で取ればそれは得となり、自分の思っていた結果であろう。

しかし、もしこれが4回、5回、何十回となると話は変わってくる。回を重ねた時、いつの間に、取ろうと思っていた商品よりも高い金額を払っている。という事が起こってくる。

しかし、こうなってしまうと、中にある商品を普通に買ったのでは、やはり今までのそれに注ぎ込んだお金のことを考えると損をしてしまうため、取れるまでは諦めきれない。

途中で諦めればそれまでの支出でよかったものを、取ることに執着し続けたことによって大損してしまうのだ。

話は戻って、なぜ自分がこの評論を読書感想文の題材に選んだのかというと、実は自分も昔、こんなことで損をしてしまったことがあるからだ。

好きな漫画を一巻から順に集めていたのだが、その漫画を友達がある時その本を全巻貸してくれた。自分はそれを読んでしまい、もう話の結末も分かつ

たというのに、今まで買った分を無駄にしたくなかった為、その漫画を結局すべて集めた。今思えば、あの時にそこで集めるのをやめれば、もしくは自分の楽しみのために借りることを断って、自分で集める楽しみを続けていれば、少なくとも損は無かったのである。

現在も本棚にしまってあるその漫画は、すでに殆ど読まなくなっている。今考えればなんて無駄なことをしたのだろうと、後悔するばかりである。

なぜあの時こうしていなかったのだろう。という出来事は、考えれば他にもたくさんある。こういうことは後になってから気付くのだ。

だが、終わった損ばかりを考えすぎると、最終的にはもっとたくさんの損をしてしまうかもしれない。また達成させることばかりを考えると、目の前の損を見過ごしてしまいがちになる。

コンコルドの誤りとは、きっとそういうものの事を言うのだと思う。

だがしかし、すべての物事が、このコンドルの誤りに当てはまると考えるのは少し違うと思う。

無駄な努力でも報われる時だってあるのだ。過去の偉大な成功者はほとんどがその例である。有名な、コロンブスの話も、途中で止めて引き返すという選択肢もあったのに、諦めずに進み続けたことでアメリカ大陸は発見されたのである。

また、あのベートーベンも、耳が聞こえなくなってしまった時に、それでも音楽という道を貫いたことで、あの数々の名曲も生まれてきたのだ。

結局、成功するかしないかの違いでしかないのだから、諦めなかったことで、もし成功すれば「努力の賜物」。失敗すれば、この「コンドルの誤り」なのだろう。

実際、最初のコンドルの話にしても、政府は「もしかしたら成功するかもしれない」という期待を抱いて、開発を続けたのだろうと思うのだ。他の誰がなんと言おうとも、もしも仮にこれが予想以上の出来で、投資の採算が取れていたのなら、政府にとっては大成功以外の何物でもない。

そして、この言葉もそこで生まれる事はなかっただろう。

たとえそれがどんな危険な賭けだったとしても、それを成功させるか、させないかは、その人の「努力」または「運」次第といったところだろう。

未来の結果は誰にも分からない。うまくいくときもあれば、いかない時もあるだろう。先の事、目の前の事、どちらも忘れることなく良い選択をしていけたらと、この評論を読んで自分は思った。



私が最初この本を読んで考えたことは「数学の美しさ」についてである。古代エジプトやギリシャでは零を使った位取り記数法がなく、桁が一つ増える度に新しい数字や記号が必要になった。扱う数が大きくなればなるほど無限に多くの数字を考案しなければならず、とても面倒だったようだ。それを解決したのが零という数字である。今まで1つの数を表すためにたくさんの記号を用い、上下左右に書いて表していたものが横に一直線だけで済むのだ。この一目見てそれぞれの数の大小など色々な情報を得ることのできる位取り記数法を可能にした零はとても美しいものだと感じた。今私がしている数学でも、求めた答えは次元の高い順に並べて答える。これは式を整理し、美しく見せるためである。また零のような数字だけでなく、図形においても数学の美は存在する。中心からの距離が等しい円など、とても美しいものである。

では数学の美しさにはどういうものがあるのだろうか。私は数学の美しさとは「いかにたくさんの情報をコンパクトにまとめられるかどうか」だと思う。先程の零の話を考えれば分かりやすいだろう。式のまとめ方や並べ方だってそうである。このたくさんの情報が凝縮し、美になるのではないかと思う。

また私は、零についてこの本からもう1つ学ぶことができた。それは「零と1の世界」についてである。いわゆるコンピュータについてである。コンピュータでは文字や数の全てが零と1によって表される。以前からどのように組み合わせるのか、どうやって組み合わせを決定するのか疑問に思っていたため、今回とても参考になった。中学での技術の時間だったことがここで解けてうれしく思う。技術で

学んだことが数学によって解決されるとは思ってもみなかった。

このように私がこの本を読んで感じたことに「他教科とのつながり」というものがある。数学者のほとんどが哲学者であったと本にもある通り、数学と哲学というのはとても密接した関係にある。同じように他の教科も色々な教科と関わりがあると思う。最近の高校入試の前期試験でも教科にとらわれない問題が多く出る。このような問題を解くには各教科の関連性、つながりについて考えながら常に問題に当たっていかなければならない。教科という枠に勉強を縛りつけてはいけない、ということだ。中学の国語の授業で「博物学の時代」という本を読んだことがある。これにも同じようなことが書かれていた。人類は長い時を経て、たくさんしたこと、もの、事象を見つけてきた。それを綺麗に分類し、深く調べていく。しかし、あまりにも細分化され、それぞれが独立していくと、全体的な広い視野から物事を見ることが難しくなってくる。これがまさに落とし穴である。

最後に、私がこの本を読んで感じたことがもう1つある。本によると古代の国は、それぞれの国との交流によって栄えてきたとある。それはソロバンでもあり、数字や文字などでもあり、様々である。また交流と言っても戦争により支配されたり、交易だったりこれもまた様々である。今でも国際交流というように、色々な国と交流する機会が私たちの身の回りにも増えてきている。このように交流し相手の国の文化に触れることで今の世界の国々は発展してきていると考えることができる。このことは、自分自身について置き換えることができると思う。私は今年の4月からこの熊本電波工業高等専門学校という新しい社会の一員となった。前の話でいう国と国との交流を自分と電波高専という社会の一員になることと重ねることはできないだろうか。電波高専は私にとって未知の世界である。それは同時に知らない知識がたくさんある、ということである。自分の世界に閉じこもることなく、どんどん新しい知識や技術を身につけることで、私は大きな人間となり、発展していく。自分を豊かにすることができる、ということなのだ。

私は将来の夢を叶えるためこの電波高専へと来た。将来の自分のためにも、今ここで頑張る必要がある。

今までの知識と、電波高専で得る新しい知識をかけ合わせ、1つに偏ることなく広い視野で勉学に臨みたいと思う。そして、数学の美しさを常に探し続け、知的好奇心を絶やすことなく、この5年間で有意義に過ごしたいと思う。自分の可能性に目をそらさず、また周囲から与えられる新しい知識をどんどん吸収し、更に大きな人間に成長していきたいと思う。それは将来の自分のためでもあり、今の自分のためでもあるということを肝に銘じて。



この小説を読んで、私がまず感じた感情は「絶望」である。正直なところ、内容に大きなショックを受けた。悲惨なストーリーである上に、この作品を書いた太宰治が作品完成の一ヶ月後に自殺したという事実、またこの作品のエピソードの大半が彼の経験の元にしてあるという点を踏まえるなら、内容はよりリアルで鮮明なものとなってくる。

物語は、主人公が自分の幼少時代を回想するところから始まる。主人公の草蔵は幼い時から他人と違う考え方、感じ方をした子だった。例えば、空腹感というものがまるで理解出来ず、空腹感からものを食べるということがなかった。食事という行為は家中にうごめいている霊たちに祈るためのものかもしれないとさえ考えていた。そして、このような異常なほど他人と違う性格で育った彼の、他人と唯一交流する手段として「道化」というものが登場する。これは事実を都合の良いように作り変え、他人の顔をうかがい、絶えず笑顔をつくる、という他人の考えることが全く分からない草蔵が必死に編み出した打開策なのである。

思えば私も多くの「道化」をしてきたものだ。家事の手伝いを頼まれれば架空の用事を提出してその場を逃れ、何か間違いを犯せばそれを他人に擦り付け、事がおさまるのを待つ、といった具合に乗り切ってきた部分がある。だが私はこれが必ずしも間違いであるとは限らないと思う。逆に、常に本心か

ら話すことが出来る人間など存在するのだろうか。例えば、「私は生まれてこのかた本当のことしか話した事はありません」という発言に賛同する者が果たしているだろうか。この草蔵のような行動は、誰でも日常的に行っていることだと言えるであろう。

そして物語は進んでいく。成長した草蔵はここで大きな転換期をむかえる。画学生堀木との出会いだ。彼との出会いで草蔵の生活は一変する。草蔵は、彼に東京を案内してもらってから、酒、淫売婦、煙草に手を出すようになる。これらにより多少の人間恐怖をまぎらすことが出来たため、草蔵はより一層それらにいきりびたるようになるのであった。

私も実生活において、同級生や先輩からたばこを勧められる事はきっとあるだろう。実際に小学生の時から幾度か誘われたことがある。幸いなことに、その時は親のきちんとした教育があったためにそのような誘いは断ることが出来たが、将来的には他にも多くの誘惑があると思う。消費者金融に手を出したり、誰かの連帯保証人になって自己破産という苦渋の決断を強いられた人はたくさんいる。そのようなことには絶対にならないようにしたいものである。

そして幾人かの女性と同棲したりしながら草蔵は最終的に薬物中毒になる。脳病院に入れられ、三ヶ月後に退院し、親戚のすすめで田舎で療養生活を送ることになる。草蔵は腑抜けのようになり、自らを「廃人」であるとも述べている。物語の最後の一文はこうだ。「自分はことし、二十七になります。白髪がめっきりふえたので、たいていの人から、四十以上に見られます。」

なんとも悲惨な人生だが、私は主人公を哀れだと思ふ。この主人公、つまり作者には真に心を通わせられる相談者がいなかった。そのため心中しようしたり、自暴自棄になり薬物におぼれたりしている。もしそのような良き理解者・相談者がいたなら、物語の結末は変わっていたのかもしれない。私もそのような友を作っていきたいと思った。

何故太宰治はこのような話を書いたのだろうか。甚だ疑問だった。作品全体がまるで自らの死を予期しているかのような口調だし、内容としても自殺志願者に向けて書いたかのような話だ。そのため私は一つの仮説を立ててみた。「作者は自殺するにあたって、心に迷いを無くすため、また自分を精神的に追い込むためにこのような話を書いたのではない

か」と。あくまで想像なので必ずしもそうだとは言いきれないが、そのような部分も多少あると思う。太宰治はこの作品を通して自分の生涯を見つめていた。そして思い返すほどに悲観し、死にたいと思うようになったのではないか。そう思うとより一層作者が哀れに思えてくるのだ。

この作品を通して、私は三つのことを考えた。本心から物事を行うことについて、他人からの誘惑について、自分のことを理解してくれる相談者についてだ。これはあくまで小説だから「お気の毒」で済むのだが、私は自分がこうなってしまうようにしたいと思う。私はこの本を読んで、自分の人生観を大きく変革させられた。そして、こんなに心に深く入ってくる作品が書ける太宰治の文才には、ただただ感服するばかりである。



太宰治は、今まで『女生徒』『走れメロス』『斜陽』『人間失格』などの有名作品を多く残してきたが、私は今まで太宰治の作品を一つも読んでいたことが無い。そこで今回は特に有名な『人間失格』を読むことにした。

最初私は、『人間失格』というタイトルを見て暗い本というイメージがあった。しかし、最後まで読み終わると最初に持っていた暗いイメージは無くなっていった。また、この本を読み終わると、同時に多くのことを考えさせられた。

この本の主人公葉蔵は、この本の中で世の中のものに異常なほどまでに不安を感じていた。そのため自分を「道化」などと言い偽り続け異常者や異端者のように記されていた。しかし、私は葉蔵が誰よりも純粋な心を持っていると思う。しかし、その純粋さは葉蔵にとって人間らしく生きるには辛い純粋さだったのだろう。他の人間が持つ心の純粋さとはかけ離れた純粋さともいおうか。他の人間は、欲張りで醜い。それが災いとなり、世間の人間の恐ろしさ、怖さ、著者が記すところの「牛が草原で、

おっとりした顔で寝ていて、突如、尻尾でピシッと腹の蛇を打ち殺すような、不意に見せる人間の恐ろしい正体」に、悩ませられながら生きていたのではないだろうか。この本を読みながらそう思った。また、もしこの様な人間がいたら私は助けてあげたいと思った。彼は、あらゆる恐怖、不安、不信、孤独とともに生きておりそれは、彼にとって、ひどく辛い事のように思ったからだ。

葉蔵が、このような暗く、自分を偽る人生を歩むようになったきっかけ、それは少年時代、自分と他人との間に、埋めても埋めきれない溝を見たことが始まりだろう。自分が他人と話す時、一言も本当のことを言っていないと感じ、自らを「道化」と偽るようになったのではないだろうか。しかし、私は、人という生き物は他人と話すとき、一言も本心から言葉を発することは無いと思う。これには、私自身にも思い当たる節がある。家族との会話、友達との会話、学校の面接、授業でのスピーチ、ディベート、全てにおいて自分は本心から言っているのだろうか、毎回考えさせられる。本心からの言葉ではないと、分かるが大抵はどちらなのか分からない。自分の本心なんて、自分でも分からないほうが多く、自分の中にもう一人自分がいるようなもので、まして他人なんか自分の本心など分かるはずもない。故に人はお互いに、互いを理解しようと努力していかなければならないと思う。

葉蔵にとって女性とはどのような存在だったのか。彼の人生には、常に女性がいた。年少時代には、姉が中学時代には、同居先の「30くらいの、眼鏡をかけて、病身らしい背の高い姉娘」のアネサと、「最近女学校を卒業したばかりらしい」セツちゃん。他にも多くの女性が出てくる。彼は、人間に対して恐怖や不信を抱いていたが、とにかく女性と人生の大半を過ごしてきた。しかし、それは本当に葉蔵の意思だったのだろうか。彼の拒否できない性格がそうさせたのではないかと私は思う。葉蔵は女性といながらも日々恐れが心の片隅にあったのではないだろうか。だが、彼の人生に二度も「幸福」なときがあったと思う。一度目はシヅ子の娘、シゲ子。彼女は、葉蔵を「お父ちゃん」と呼び慕う。その姿は、葉蔵にとって今まで接してきた女性とは、明らかに違って見えたと思う。この時初めて「幸福」というものを知った瞬間だっただろう。二度目は、「バア

の向かいの、小さい煙草屋の17、8の娘」であるヨシ子。彼女もまた、今まで出会った女性とはまるで違い、清らかな娘だった。この二人は葉蔵にとって初めて自分と分かり合えるかもしれないという可能性を感じたと思う。

しかし、この二つの「幸福」を失った先に待っていたのが「人間失格」。しかし、彼の日記を託せられたバアのマダムは、葉蔵のことを「神様みたいにいい子でした」と言っている。葉蔵は本当に「人間失格」となったのだろうか。また、葉蔵と正反対の生き方をしたら「合格」となるのだろうか。周りに恐怖や不安を持つのは当たり前で、自分の殻にこもることもあるだろう。周りに不安を持たない人間こそが、本当の「人間失格」ではないのだろうか。

これを執筆した三ヶ月後に太宰治は、自殺している。太宰治も葉蔵と同じ悩みや考えを持っていたのではないだろうか。そのため「太宰の遺書」という解釈もできるのではないだろうか。



恋。それは、耳にただけで若干の気恥ずかしさを感じる言葉。最近流行っている「ケータイ小説」と呼ばれるもので、頻繁に取り上げられるテーマ。そのような名を冠した本を、私はこの春に読んだ。

なぜこの本を選んだのか？平たく言ってしまうと、勘である。私は、『恋』という果てしなく真っ直ぐなタイトルに惹かれてしまったのだ。実にシンプルで、それでいて心にずしりと響くフレーズ。この時から、私は作者が生み出した世界に引き込まれていたのかもしれない。

恋には様々な形がある。微笑ましい小学生の恋。不安ばかりが募る遠距離恋愛。叶うことのない悲しい恋。結ばれた者たちの数だけ、誰かのことを思う者たちの数だけ、その形は存在する。しかし、作中で描かれている恋の形は、私が今まで見たり聞いたりしたそれとは全く異なるものだった。

物語の中心となる人物は殺人・傷害を犯し、10年

間の服役を終えて出所した矢野布美子である。彼女は、自分が人を殺めた理由とそれに至るまでの経緯を、ジャーナリストに語る。やがて訪れる死を悟ったからか（彼女は末期ガンだった）、法廷では決して口にする事のなかった真実を、布美子のやや厚めの唇が紡いでゆく。

彼女の追憶のなかに浮かび上がってきた恋は、私知らないものだった。いや、私だけでなく、連ドラ好きの母も、ケータイ小説に目がない妹も、このような恋は全く知らないだろう。私は驚き、考え、首を傾げた。納得できなかったからである。

恋とは、相手を欲し、時に独占したいとまで思うものではないのか。相手の心も肉体も手に入れたという、烈火の如き思いではないのか。私の経験上、恋とはそういうものだと言われる。ところが、である。布美子が経験したそれは、一筋縄ではいかない。何しろ、彼女は異性と同性を同時に好きになってしまったのだ。

布美子が出会った片瀬夫妻という一人の男と一人の女は、完璧な対を成していた。布美子は「神のような」と形容しているが、私もその通りだと思った。アダムとイヴのように、最初から決められていたように、お互いを求めている。性的な言動までもが、完成された美しさに満ちているのだ。布美子は、そんな夫妻に恋をした。女として信太郎に抱かれ、女として雛子と接吻を交わした。納得はできなかったが、私は文面から立ち昇るオーデコロン匂いに酔わされた。

片瀬夫妻の恋は、奇妙だ。私が肯定するものとは違う。言語化するのはかなり難しいのだが、あえてこの恋に名を付けるとするならば、私はこう名付けたい。「不変的な絆による永遠の恋」だと。

夫妻の恋において、肉体は必ずしも重要ではない。あくまでも、お互いを感じるための手段である。ここが私の考えと大きく異なる点であり、最も理解しがたい部分である。だから信太郎はアルバイトに来ていた布美子を抱くし、雛子はレストランを営んでいる副島に抱かれるのだ。それなのにお互いを愛しているだなんて、とても私のような凡人には理解できない。繰り返すが、私が考える恋のなかで、肉体というのは最終目標に等しい。肉体で繋がってこそその恋人だと私は思う。もちろん、それ以前に精神の繋がりも大事だ。

片瀬夫妻の場合、おそらく精神の繋がりが半端ではなく強いのだろう。お互いが信じているのだ。「自分は愛しているし、愛されている」と。そこに猜疑心などかけらも存在しない。確固たる信頼は、こんなにも輝くモノを生み出す。私が知っていたモノが、下賤で低俗なモノに見えてしまうほどに。

物語は一人の青年の登場により、思わぬ展開を迎えるのだが、この青年がまた憎らしい。布美子が彼に抱いた殺意に、私も共感してしまうくらいにだ。彼は、三人の関係に変化をもたらした。それも、望ましくない方向へと。本に登場する人物に、私はこれほど強い憎悪を抱いたことは未だかつて経験したことがない。布美子が彼を射殺した時、私は歓喜のあまり声をあげそうになった。

物語はジャーナリストの動向に引き継がれていくのだが、読了後私は「やはり恋って素晴らしい！」と思った。こんなにも人が悩み、悦び、悲しみ、本能を曝け出す行為が他にあらうか？いや、あるまい。人は恋をすると、感情が豊かになり、表情がこころ変わる。周囲から見れば、きっと恋をしている人は輝いているだろう。それは、本能と理性とが創り出した、生命の煌めきなのだ。

今恋をしている人もしていない人も。素敵な恋をしよう。きっと、何かが違って見えるから。生きていることを、心から幸せに思えるから。そんなことを考えつつ、まずは自分磨きをしなくてはと思う16歳・男なのであった。



この『蒼天航路』という小説は、三国志を題材とし、その中でも曹操孟徳という人物に注目し、主人公として描いた物語である。

実は、私はこの小説をこの学校の1年生の時に読書感想文の題材に選び、実際に書いている。しかし、その時はこの作品自体が完結しておらず、自分自身の文章も納得行くものではなかった。そういったことと、この学校での最後の年の締めくくりとしての

意味も含めて、この作品を読書感想文の題材としてもう一度選ぶことにした。

三国志は戦乱の話だが、戦争ばかりが英雄の行ったことではない。曹操という人物が行ったことで、私が一番注目したのは『求賢令』という布告である。これは、「不仁、不孝の者でも構わない、ただ才能のみを挙げよ」という内容の布告文書である。現代の感覚では特に問題のない当然の内容の布告であるように感じる。能力を重視し、力のある者を抜擢する。利になかった選択である。

しかし、この時代における中国の時代背景を考えると、この布告が異端の極みであることが分かってくる。この時代の中国は、儒教思想が根底にある。親に孝、君に忠を美德として漢という国は400年の歴史を作ってきた。我々一般人には、にわかに想像できない400年という歴史から作り出されたその時代の人間全てを縛り付ける概念。だが、その概念から弾き出された者の中にも優れた者はいる。曹操はそれを信じ、そういった者を抜擢できるシステムを作り上げ、実際に彼の周りには優れた人材が綺羅星のごとく集まった。この曹操の常識を叩き壊す選択が私を惹きつけて止まないし、この作品の一番面白い部分ではないかと思う。

では私自身の生き方はどうか。私はどちらかと言えば、常識に捕らわれた人間だと思う。現代の、特に日本という国の中では、おそらくそういった人間の方が大多数を占めるだろう。普通とか、世間という言葉が重要とされる社会の中で、そのほうが生きやすいのは間違いないことで、悪い選択ではないと思える。実際に今までそのほうが生きやすかったのは事実だ。だが、私にはどうしても普通では終わりたいものがある。それは文章に関してのことである。

曹操は、非常に優れた才能を持っていた。戦争、政治、文章、絵画、音楽、舞踊、そして人物としての魅力。あらゆるものに興味を示し、あらゆるものに卓越した万能の英雄だった。私は、理想を語るには、それに見合う力が必要だと思っている。おそらく曹操には、その時代の常識を覆すほどの理想を語るだけの才能があった。では私はどうか。おそらく私は曹操の欠片ほどの才能も持っていない。こういった文章を書く時だけでも、少しでも曹操のように突飛な発想を持ちたいと思い、良い子でお上手な

文章にだけはならないようにしようとしている。常に自分の思ったことを、例えそれが非一般的であっても、非倫理的であっても、筋道を立て、自分の中から出てきた言葉で説明し、自分の考えを文章に叩き付けたいと思っている。この感想文さえも、本当は読書感想文としては反則スレスレの部分で書いている。この『蒼天航路』という小説の作者は、執筆途中で亡くなってしまっており、赤壁の戦い以降の部分は漫画家が引き継いで描いた漫画版しか存在していない。当然この感想文で書いている事例などは漫画から引っ張ってきている。常識的には漫画の読書感想文など書いてはいけないことは分かっている。だが「それはなぜなのか？なぜ漫画ではダメなのか？」という異端な思考を強引に引き出して前に進む。本当は漫画がダメな理由など分かっている。読書感想文は読書を奨励するためのもので、その奨励されるべき本に漫画は入っていない。あくまで活字を読む奨励である。しかし、それでも必ず活字書籍以外のものを書く機会を作ることを心がけている。ノベルゲームや漫画でも引っ張ってくる。そんなことばかりしている。

ただ、曹操の突飛と私の突飛は決定的に違う点がある。曹操は自分の行いを正しいと確信し、今の汚名より千年先の未来を見ていた。しかし、私は自分が正しいという確信が持てない。今、この文章を書いている時でさえ、間違っているのではないか、馬鹿なことをしているのではないかと疑心暗鬼だ。だが、こんな文章でも稀に認めてもらえる時がある。私は自分の琴線に何か触れた作品でしか文章を書かない。それに対するなりふり構わぬ意見が認められることはとても嬉しい。千年先は見えないが、次も少しがんばってみようと思える。

私は「感情をぶっ放さずして何の命だ！」という曹操のセリフが大好きだ。感情をぶっ放したくなるような良い作品に出会えたら、またこんな風に自由に意見を書いていきたい。

第54回

青少年読書感想文全国コンクール 熊本県審査入賞者!

第54回青少年読書感想文全国コンクール熊本県審査において、校内読書感想文コンクールで入選した3名を応募し、2名が入賞を果たしました。

表彰式は、平成20年12月17日（水）、校長室で行われました。

記

優秀賞… 2年1組 諏訪久美子 「野 火」

入 選… 1年4組 水間 海帆 「夜のピクニック」を読んで



〈図書館改善のアンケート調査及び結果について〉

平成20年12月中旬に本科1年～5年生を対象に「図書館改善のためのアンケート」調査を実施しましたが、皆様のご協力により、下記のような貴重なご意見を頂きましたので、これを参考にしてさらに利用しやすい図書館づくりを目指したいと思います。今後も、いろいろご意見・要望等ありましたら、図書館閲覧室の設置しております「希望の声」の箱に入れて頂ければ幸いです。

「図書館改善のためのアンケート」の内容及び結果

1. 図書閲覧質についてのアンケート

(a) 図書館の使い心地について、ご意見がありましたら記入してください。

(使いやすさ、外見、机の配置、設備、貸し借りのシステムなど)

- ①貸し出し期間を長くして欲しい ②本の場所を分かりやすく ③本棚が多いところに照明を増やす
- ④パソコンを増やして欲しい ⑤歴史の本を入れて欲しい ⑥利用しやすい、おちつく
- ⑦貸し借りのシステムがわかりにくい。貸し借りを手軽に出来ないか
- ⑧椅子が低い ⑨近代～現代文庫をわかりやすいところに ⑩静かでいい ⑪机の仕切りは不要
- ⑫広くして欲しい ⑬窓際の隣り合った机の間に仕切りが欲しい
- ⑭利用者が自分で借りる手続きが出来るシステム ⑮もっと緑を増やして欲しい
- ⑯個室が欲しい ⑰「新刊コーナー」だけでなく「お薦めコーナー」も設けて欲しい
- ⑱「雑誌コーナー」付近のソファを移動して欲しい ⑲親切で良いと思う
- ⑳本をもっと詳しく分けて欲しい ㉑本の種類が少ない
- ㉒大きな机よりも半分位の大きさの机がよい ㉓図書館の閉まる時間が早い
- ㉔騒いでいる人がおおいので、静かにして欲しい (特にテスト前)
- ㉕PCの動作が遅いので、OSを変えてほしい。パソコンを新しくして欲しい
- ㉖過去問を2部置いて欲しい ㉗もっとやわらかい椅子にして欲しい
- ㉘シリーズ、全集ものがちゃんと揃ってない ㉙貸出数を増やして欲しい
- ㉚本棚をもっとオシャレにしてほしい ㉛もっとゴージャスにして欲しい

(b) 図書館の本のラインナップについて、ご意見がありましたら記入してください。

(こんな本が欲しい、こんなコーナーがあるといい等の要望)

- ①図書館内の本の全体の配置図 ②マンガ雑誌コーナー ③人気ランキング的なものが欲しい
- ④専門科目の参考図書 ⑤C言語オンリーコーナー。バラエティが少ない。
- ⑥今話題になっている本
- ⑦ライトノベル 哲学の本 バスケの本 物語を増やす 楽しい本 高校生向けの本 星新一の本
グリム童話的なもの 心理学 ミステリー 空想科学読本 プログラミング系統
日本文学 映画の本 理論物理教程 電撃文庫 スポーツの本 技術書 図解雑学シリーズ
- ⑧半端に揃っているシリーズものは全て揃えて欲しい ⑨推理小説、神話の本、現代文学
- ⑩文庫本、資格取得関係、心理学、日本文学、洋物古書 ⑪機械工学関係、デザイン関係
- ⑫技術系の専門書 ⑬ノベルズを増やして欲しい
- ⑭英語の本や、最新の本が欲しい (特にIT関係) ⑮詩集

⑩資格の本、工業系の本、Javaの本

2. 雑誌コーナーについてのアンケート

(a) 雑誌コーナーにある中で、読んでいる雑誌がありますか？あるならば雑誌名を記入して下さい。

- ①ニュートン ②ロボコンマガジン ③タンクマ ④オートバイ ⑤ギター系
⑥スクリーン ⑦NO！ ⑧トラ技 ⑨CDデータ ⑩DVDデータ ⑪CDデータ

(b) 置いて欲しいと思う雑誌はありますか？ありましたら雑誌名を記入してください。

- ①ファッション系の本 ②ELO ③スポーツ（バスケ）の本 ④Mac Fan ⑤Mac People
⑥Bike Bros ⑦CG world ⑧ユリイカ ⑨Ollie ⑩陸上マガジン ⑪音楽誌
⑫スポーツ雑誌 ⑬バンドジャーナル ⑭ファミ通 ⑮図書館通信（空想科学研究所）
⑯PATI☆PATI ⑰popteen ⑱vivi ⑲月間「Dragons」 ⑳車関係 ㉑サッカー関係
㉒Riders club ㉓GARRRR ㉔Windows 100% ㉕Swith ㉖Mactan ㉗PC関係雑誌
㉘月刊エアライン ㉙タウンワーク ㉚テレビジョン ㉛日経ソフトウエア
㉜日経エンタテイメント ㉝英語の雑誌を増やしてほしい ㉞スポーツ誌 ㉟Free & Easy

3. 広報誌“くぬぎの森”についてのアンケート

(a) “くぬぎの森”に掲載する記事内容に対して要望があれば記入してください。

また、魅力ある広報誌になるようなアイデアがあればそれも記入してください。

- ①くぬぎの森 とは何か？ ②くぬぎの森 はどこにあるのか？ ③存在をアピールしたほうがいい
④面白いネタ ⑤もう少し親しみやすい広報誌にすると良い ⑥字数が多い
⑦クラス別の貸出冊数を掲載 ⑧目立つところに置いたらどうか

4. その他

(a) 上記以外に、図書館に対して要望があれば記入してください。

また、学生の方々が図書館に足を運ぶようになるアイデアがあればそれも記入してください。

- ①閉館時間の延長 ②コピー機を増やす ③過去問を増やす ④読書量コンテスト
⑤漫画を増やす ⑥狭い ⑦貸し出し期間の延長 ⑧新しい本を紹介して欲しい
⑨パソコンを増やして欲しい ⑩低学年向けの本 ⑪資料系以外が欲しい
⑫バックナンバーを見たい ⑬図書館のことについてアピールするのが弱い
⑭床の色を変えてみてはいかがでしょう
⑮どんなものが置いてあるか分かりづらいので、分かりやすく
⑯シリーズものは早めに揃えて欲しい
⑰電子掲示板でオススメの本を知らせる ⑱パソコンを使いやすく ⑲飲食可能にして欲しい
⑳入り口をもう少し広くして欲しい ㉑新刊や雑誌のこまめの情報発信
㉒他の図書館の本の一部をローテーションで回して借りられるようにする
㉓情報棟にも図書室が欲しい
㉔古い本がある。PC関連は役に立たない本もあるので、処分も考えては？
㉕話題になっている本を入れて欲しい ㉖貸出冊数を増やして欲しい

- ②7新刊図書リストを教室に掲示してほしい ②8本が全体的に古い
 ②9手の空いている先生を待機させておくと、勉強したい人がくると思う
 ③0長机を区切って欲しい ③1最新の入荷だけでなく、比較的新しい本のコーナーも欲しい
 ③2古いコーナーにあるともう探しだすことができない
 ③3専門書を種類で整理して欲しい

「図書館だより」編集担当委員

図書館長	田 畑 亨
図書館運営委員	八 田 茂 樹
情報工学科 5年(委員長)	西 山 賢志郎
情報通信工学科 4年(委員)	小 西 遼

編集後記

本年度も編集後記を記す時期になりました。散歩に出かけると梅にウグイスの組み合わせに心が和む季節です。世の中は「百年に一度の不況」となりましたが、「寒い冬は下に根を張れ」で、今はゆっくりと自分を見返す良いチャンスを与えてもらったと前向きに考えることにしましょうか。その時にパソコンや携帯でなく、書物を片手に考えたいものです。

恒例の『くぬぎの森』がようやく仕上がりました。印刷された冊子のページをめくるとき、次に何が書いてあるかとわくわくします。これはやはり印刷されないことには味わえません。今回は読書や図書館をめぐる随想を、図書館長の田畑先生、情報工学科の村上先生からそれぞれ御寄稿いただきました。また去年はなかった学生諸君の随想もあります。生き方に影響を与えた田畑先生の「私の一冊」、熊本を中心に海外に出た日本人の系譜を探る村上先生の作品、そして拙稿を含めて、学生の皆さんの読書と生き方の参考になればと思います。

次いで読書感想文コンクールの選考結果、及び入選作品を例年の通り掲載しました。審査員の先生方、御選考ありがとうございました。学生諸君の感性に共感を覚えます。本冊子を作成するに当たり図書担当緒方様をはじめとする図書館の事務室の皆様にはお世話になりました。ここに記して感謝いたします。教職員・学生の皆様、ぜひとも御一読いただき、今後とも気軽に図書館を利用していただけると存じます。

図書館運営委員会委員：八田 茂樹